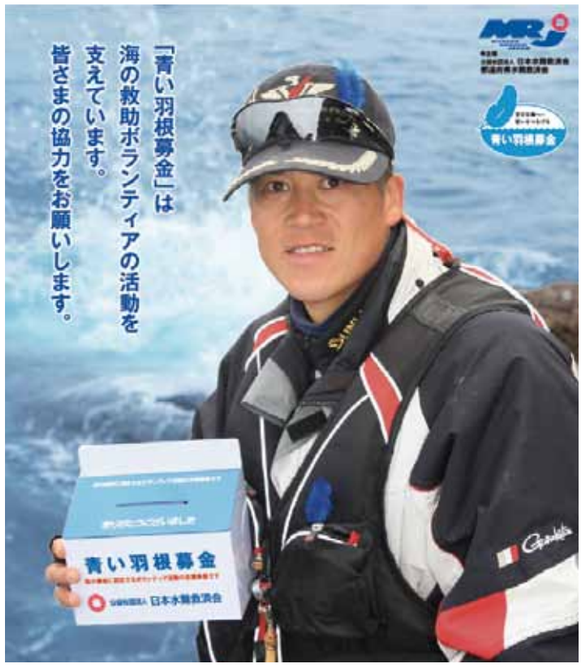
全国54,000人の“海の救難ボランティア”の活動を支えます。

「青い羽根募金」にご協力を



青い羽根募金アドバイザー
阪神タイガース 城島 健司 選手

■募金の方法

口座振込みによる募金

郵便局
口座番号　00120-4-8400
加入者名　公益社団法人 日本水難救済会

銀　行
三井住友銀行 日本橋東支店
口座番号　(普)7468319
加入者名　公益社団法人 日本水難救済会
青い羽根募金口

インターネット募金

青い羽根募金　検索

クレジットカード　MasterCard　VISA　JCB　AMERICAN EXPRESS

電子マネー　ちょコム

- ホームページから以下の方法で募金ができます。
- クレジットカードはMasterCard、VISA、JCB、AMEXがご利用できます。
- NTTコミュニケーションズが提供するネット専用電子マネー「ちょコム」がご利用できます。

●お問い合せ先　0120-01-5587

募金フリーダイヤルでお申し出くだされば、振込料無料の専用郵便振替用紙をお送りします。

公益社団法人 日本水難救済会

〒102-0083 東京都千代田区麹町4丁目5番地 海事センタービル7階
TEL：03-3222-8066　FAX：03-3222-8067
http://www.mrj.or.jp　E-mail　V1161@mrj.or.jp

ありがとう競艇　「このイベントは競艇の交付金による日本財団の助成を受けて実施します」

平成23年度 日本財団 The Nippon Foundation 助成事業

マリンレスキュージャーナル

Vol 103 No 2
2011|8月号

特集 マリンレスキュー紀行
海の安全にかける男たちの群像
NPO秋田県水難救済会　八森救難所
第45回　海難救助訓練大会

「青い羽根募金 2011」活動レポート

MRJ歴史探訪シリーズ 第5回
ボランティア精神の源を訪ねて

公益社団法人 日本水難救済会
マリンレスキュージャパンは、(社)日本水難救済会の愛称です。

お見舞い

地震と津波による甚大な被害により
命を落とされた方々のご冥福をお祈りするとともに、
負傷者の一日も早いご回復を願い、
被災された方々に対してお見舞い申しあげます。
救難所、また、所員それぞれの家や漁船に及んだ被害も
大きいのではないかと案じながら、
所員の生活の早い復旧をお祈りしています。
また、皆さんで協力して、
その専門知識を生かして地域の支えとなり、
その復興にご尽力いただくことを願っております。

平成23年3月
公益社団法人　日本水難救済会
名誉総裁　**憲仁親王妃久子**

名誉総裁 憲仁親王妃久子殿下が、宮城県水難救済会 亘理救難所等をお見舞いされました。

平成23年5月30日、（公社）日本水難救済会の名誉総裁　憲仁親王妃久子殿下が、ご長女である承子女王殿下とともに宮城県にお成りになり、宮城県水難救済会亘理救難所等をお見舞いされました。

お見舞いに先立ち、両殿下は第二管区海上保安本部（塩釜市）に立ち寄られ、海上保安庁の震災対応の状況や、宮城県水難救済会の被災状況の説明等を受けられたほか、同本部の運用司令センターをご視察。職員を激励されました。

その後、亘理町荒浜の「宮城県水難救済会　亘理救難所」へご移動。亘理町長をはじめ、亘理救難所員等約60名がお出迎えをしました。亘理救難所で妃殿下は承子女王殿下とともに震災犠牲者への献花・黙祷をされた後、所員一人ひとりにお見舞いの言葉をかけられました。

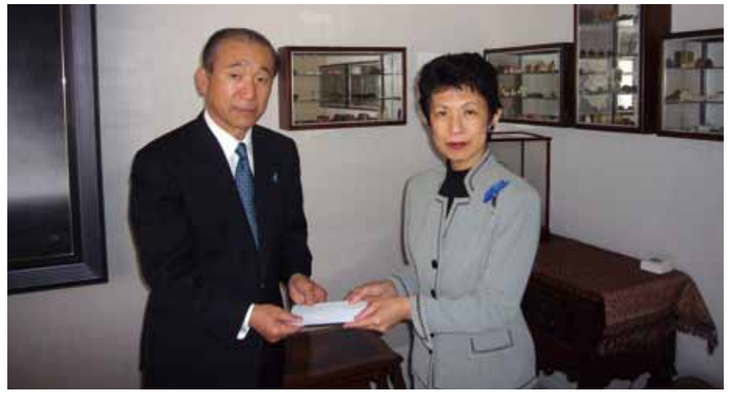
東日本大震災の犠牲者に献花をされる
妃殿下と承子女王殿下

亘理救難所員に言葉をかけ、激励される久子妃殿下

■亘理救難所位置図

名誉総裁　憲仁親王妃久子殿下より、被災者へのお見舞い金を賜りました。

東日本大震災発生より11日後の3月22日、名誉総裁　憲仁親王妃久子殿下より、お見舞いのお言葉とともにお見舞い金も賜りました。



妃殿下よりお見舞い金をお預かりした本会相原会長

被災した4県の水難救済会にお見舞い金と義援金をお届けしました。

被災20日後の4月1日、名誉総裁のお見舞いのお言葉と本会よりの見舞金を携え、(社)日本水難救済会の常務理事と職員1名が福島県水難救済会と茨城県水難救済会を訪問。岩手県と宮城県に向かう交通手段が確保できなかったことから、岩手県水難救済会と宮城県水難救済会については郵送でお言葉と見舞金をお届けしました。

そして5月19日、本会会長が岩手県水難救済会と宮城県水難救済会を訪れ、全国の水難救済会より寄せられた義援金(第一次配分)を贈呈。福島県水難救済会と茨城県水難救済会には送金を行いました。

義援金の第二次配分は9月下旬を予定しています。

岩手県水難救済会 大井会長(左)に義援金をお渡しする相原会長

宮城県水難救済会 木村会長(右)に義援金をお渡しする相原会長

【義援金の受付と配分の状況】

●義援金の受付状況(平成23年5月16日現在)

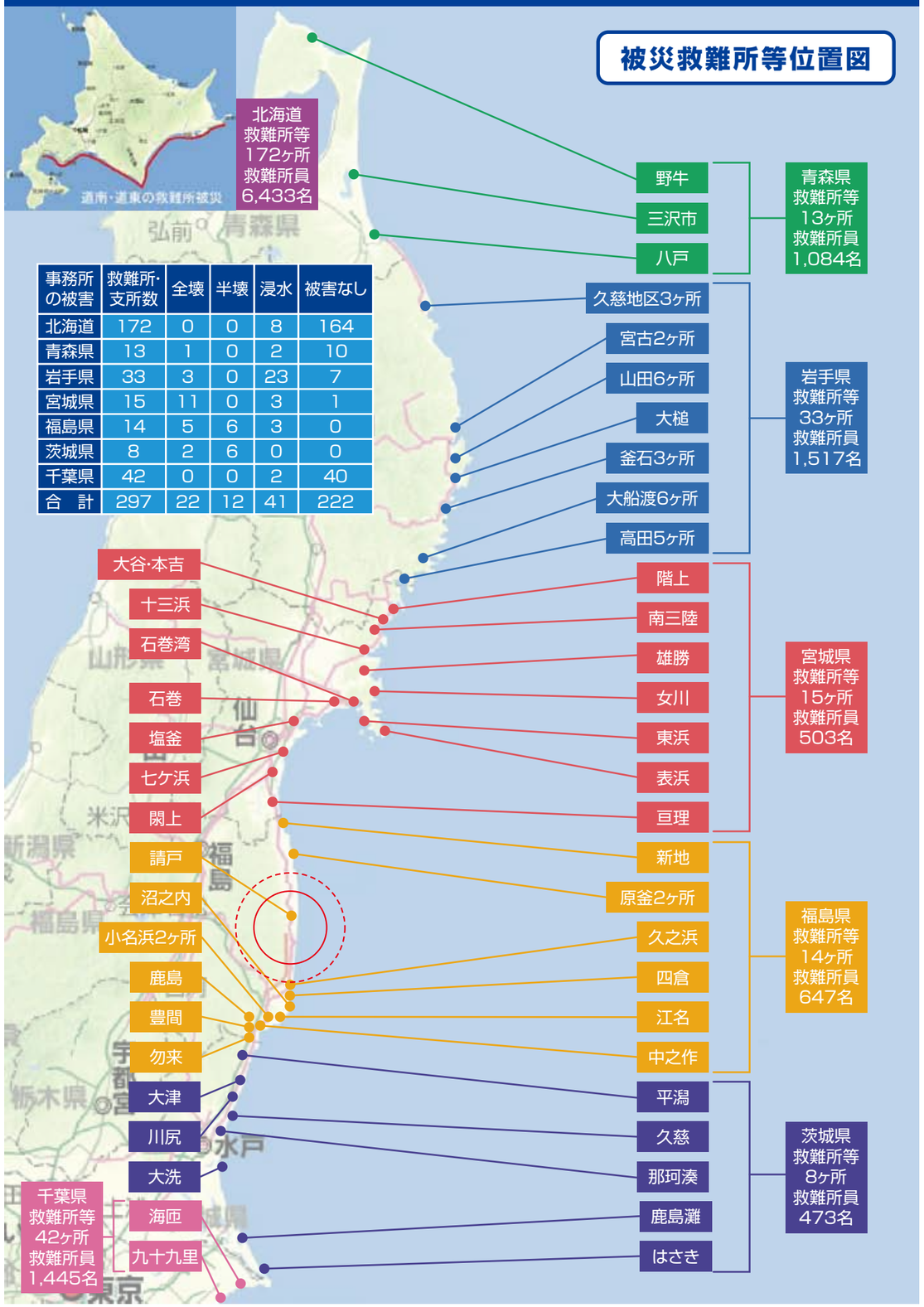
○個人、企業等からの義援金：5社、19名／547,600円
○救難所からの義援金：62救難所(新潟県6、愛媛県3、広島県1、大阪府1、福岡県41、長崎県10)／2,129,667円
○青い羽根募金からの義援金：本会、9水難救済会(静岡地区、徳島、石川県西部、香川、広島、岡山、大分、鹿児島、琉球)：1,800,000円

合計：4,477,267円

●義援金の配分(第一次配分)

○岩手県：1,500,000円　○宮城県：1,000,000円　○福島県：1,000,000円　○茨城県：500,000円

東日本大震災の被害状況



事務所の被害	救難所・支所数	全壊	半壊	浸水	被害なし
北海道	172	0	0	8	164
青森県	13	1	0	2	10
岩手県	33	3	0	23	7
宮城県	15	11	0	3	1
福島県	14	5	6	3	0
茨城県	8	2	6	0	0
千葉県	42	0	0	2	40
合　計	297	22	12	41	222

各地の被害状況

岩手県水難救済会　（救難所数(支所数)／7（26）、所員数：1,517名）

【被害状況】

久慈および宮古地区の7救難支所を除く26の救難所等で甚大な被害を受け、人的被害は死者・行方不明者31名。漁船の被害も甚大であり、約4,000隻以上が被災し、その被害額は約70億円と報告されています。

［判明分］

○救難所･支所：全壊3･浸水23（被災救難所所員数969名）
○救助員の死亡・行方不明：31名
○漁船被害：14,200隻中4,014隻が被災（※1）
○救難器具：26救難所・支所が被災

釜石救難所釜石東部支所（内部全壊）

宮古地区救難所田野畑支所（全壊）

宮城県水難救済会　（救難所数／15、所員数：503名）

【被害状況】

唐桑救難所を除くほとんどが倒壊・浸水し、現在までに死者47名・行方不明者37名が報告されていますが、被害の全体像は未だ把握できていません。漁船の被害も壊滅的で12,000隻以上が被災し、その被害額は約1,052億円と報告されています。

［判明分］

○救難所･支所：全壊12･浸水3（被災救難所所員数446名）
○救助員の死亡・行方不明：10名
○漁船被害：13,570隻中12,011隻が被災（※1）
○救難器具：15救難所・支所が被災

雄勝救難所（内部全壊）

亘理救難所（全壊）

福島県水難救済会　（救難所数(支所数)／12（2）、所員数：647名）

【被害状況】

救難所のすべてが津波により甚大な被害を受け、行方不明者も多くなっています。請戸救難所は原発事故による避難指示区域となっているため、被災状況の調査は現在のところ困難です。漁船の被害も甚大で、80%以上が被災しました。

［判明分］

○救難所・支所：全壊5・半壊6・浸水3
（被災救難所所員数647名）
○漁協組合員の死亡・行方不明：95名（※2）
○漁船被害：1,068隻中873隻が被災（※1）
○救難器具：14救難所・支所が被災

沼之内救難所（全壊、土台のみ残存）

新地救難所（内部全壊）

茨城県水難救済会　（救難所数／8、所員数：473名）

【被害状況】

救難所のすべてが津波により甚大な被害を受け、大津支部・大洗支部救難所は全壊し仮事務所に移転しました。その他救難所の1階はほとんど津波で浸水し、資器材類は流出または使用不能となっています。所属の所員は大津支部の1名が行方不明となっています。また、漁船の約20%が被災しました。

［判明分］

○救難所・支所：全壊2・半壊6
（被災救難所所員数473名）
○救助員の行方不明：1名
○漁船被害：1,215隻中249隻が被災（※1）
○救難器具：8救難所・支所が被災

大洗支部救難所（事務所損壊）

大津支部救難所（１階全壊、２階損傷）

※1 被災した漁船のうち、救助員所有船舶の占める割合は不明。　※2 死亡・行方不明の漁協組合員のうち救助員の占める割合は不明。

【NPO神奈川県水難救済会　西神奈川広域救難所からのご報告】

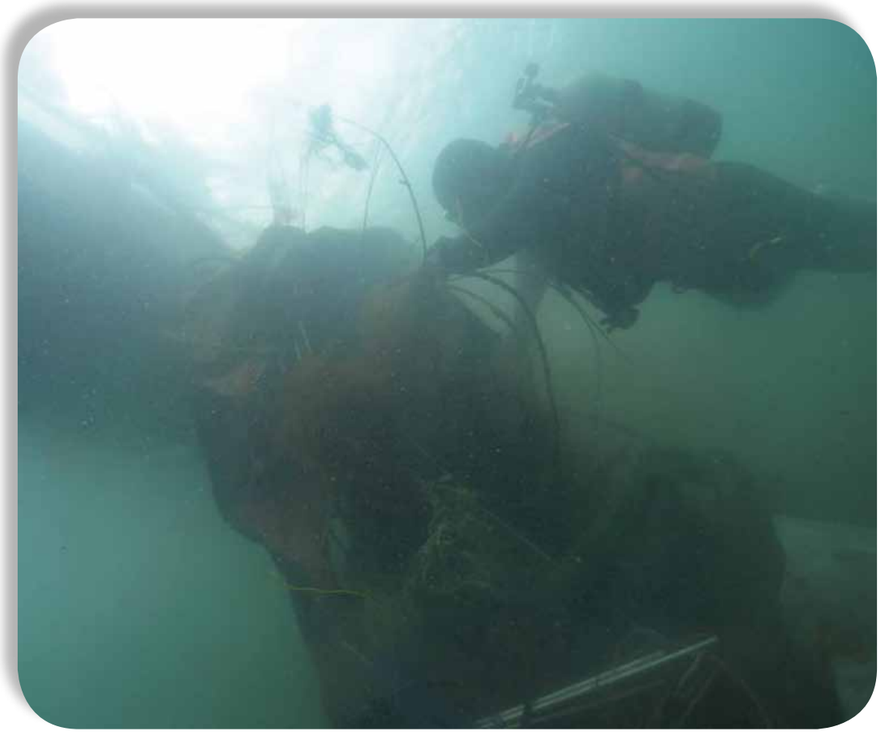
被災地・岩手県大船渡市で、港内のがれき撤去や養殖復旧作業の支援活動に参加しました。

東北から北関東にかけての太平洋沿岸地域に未曾有の被害をもたらした東日本大震災。その復興に当たり、我々ダイバー組織にはどのような貢献ができるかを検討していたところ、「三陸ボランティアダイバーズ（岩手県）」が被災地港内のがれき撤去やワカメ養殖に使用する親株採取の支援を呼び掛けていることを知り、6月12日から4日間、岩手県大船渡市三陸町の崎浜港、恋し浜港、吉浜での作業に参加することとしました。

海中は泥が巻き上がるとアッという間に視界が悪くなり、海底は津波により流された大量のがれきで埋まっていました。尖ったトタン屋根など危険なものや、自動車など人力では引き上げられないものなども見られ、海中の清掃作業の困難さを痛切に感じました。

地元漁師の皆さんが漁業を行い、ダイビングなどの愛好者が親しめるような状態にこの海が戻るために、この先どれくらいの時間が必要なのか、我々は今後どのような支援をしていけるのか。巨大な被害の状況を前に、自分たちの微力さを思い知った帰途となりました。

しかし、今後も機会を見て、こうした支援活動に参加していきたいと考えております。



海中でのがれき撤去作業の様子

ボランティア活動を行った西神奈川広域救難所の救難所員

引き上げたがれきの一部

【宮城県水難救済会より、被災地の「いま」】

少しずつ、けれど着実に。復興に向かって歩み続けております。

がんばろう東北！
がんばろう宮城！！

東日本大震災から5ヶ月、宮城県水難救済会の「その後」をご紹介します。

宮城県水難救済会では震災で10名の救難所員が犠牲となり（7月15日現在）、県下にあった15救難所の事務所すべてが津波の被害を受けました。

このような状況ではありますが、5月30日、宮城県水難救済会の「亘理救難所」へ、日本水難救済会名誉総裁　高円宮憲仁親王妃久子殿下、承子女王が御成りになられ、疲弊する亘理救難所員の一人ひとりにお声掛けをいただきました。この経験により、復興に向けてがんばろうと、所員は意志を新たにいたしました。

また、救難所のある塩釜港で4月14日に震災後初の水揚げが行われたことを皮切りに、県内各地で水揚げが始まり、少しずつではありますが復興に向けて前進しております。

まだまだ終息の見えない状況が続きますが、今まで通りの救助体制を1日でも早く実現するため、震災に負けず、所員一丸となってがんばってまいります。

震災から5ヶ月後の亘理町荒浜漁港。手前に見えるのは再開した市場。奥には稼働する漁船も

震災直後の亘理町荒浜漁港の様子。左奥に、岸壁に乗り上がった漁船が見える

マリンレスキュージャーナル

Vol 103 No 2
2011|8月号

CONTENTS

01 名誉総裁　お見舞いのおことば
02 名誉総裁　宮城県水難救済会亘理救難所等お見舞い
03 義援金・お見舞い金のお届け
04 東日本大震災の被害状況
05 各地の被害状況
07 NPO 神奈川県水難救済会　西神奈川広域救難所からのご報告
08 宮城県水難救済会より、被災地の「いま」
10 特集　マリンレスキュー紀行
海の安全にかける男たちの群像
NPO 秋田県水難救済会　八森救難所／第 45 回　海難救助訓練大会
16 全国救難所のお膝元訪問
ニッポン港グルメ食遊記 【秋田県八峰町八森／秋田県漁業協同組合北部総括支所】
17 「青い羽根募金2011」活動レポート
平成23年度　青い羽根募金強調運動／青い羽根募金支援自動販売機の設置状況／広報・周知活動
21 MRJ歴史探訪問シリーズ　第5回
ボランティア精神の源を訪ねて
「海上信仰の仏像」
23 レスキューグッズの最前線
マリンレスキュー MONO ギャラリー
25 レスキューステーション NEWS
救難所だより 海難救助訓練／新設救難所の紹介
31 水難救済思想の普及活動レポート
35 レスキューレポート　水難救助活動報告 海難救助／洋上救急
42 MRJ 互助会通信
44 MRJ フォーラム　読者の広場
46 MRJ からのお知らせ

表紙：NPO 秋田県水難救済会　八森救難所

マリンレスキュー紀行

海の安全にかける男たちの群像

NPO 秋田県水難救済会 八森救難所

八森救難所の皆さん。第45回海難救助訓練大会の会場となった金浦漁港にて。

恵みの海は、時に表情をがらりと変える。荒海から漁業者の命を守り抜いた、北国の男たちの「戦いの軌跡」。

取材協力：秋田県漁業協同組合北部総括支所

ハタハタで知られる北の日本海を訪ねて

本州最北端の青森県に隣接し、「米どころ」「酒どころ」と謳われることからもうかがえるように、肥沃な大地と豊かな水に恵まれる秋田県。日本海に面し南北に約263kmの海岸線を持つ秋田県では漁業が主要産業の一つであり、定置網や底引、釣りなどの漁法でタイやヒラメ、タラ、スルメイカなど多種多様な魚が水揚げされている。

中でも特に知られているのが「ハタハタ」だろう。冬の訪れとともに群れをなして沿岸に押し寄せてくるハタハタは、長い北国の冬の食卓を支える貴重なタンパク源として県民に重宝されてきた。また、魚を発酵させてつくる調味料である魚醤「しょっつる」の原料として、塩・米・麹で漬け込んだなれずしの一種「ハタハタ寿司」の素材として、秋田食文化の伝統を支えてきた。

昭和40年代には年間15,000トンもの漁獲量を誇ったハタハタは、海洋環境の変化や乱獲により激減。平成3年には71トンにまで落ち込んだ。危機感を持った県と漁業関係者の協議により、全国でも類を見ない「自主禁漁」が平成4年から3年間行われ、その後漁獲量は徐々に回復。近年では年間2,000トンを超えるまでになっている。

取材班が今回訪ねたのは八峰町（はっぽうちょう）八森。ハタハタ漁の名所として「秋田名物八森ハタハタ」と秋田音頭でも挙げられている漁業の町である。

取材当日の八森の海。岩礁に波が押し寄せては砕け、泡を立てて引いていく。

冬の海の変貌は、時に経験豊かな漁業者の勘さえも超える

秋田県内でもさらに北側、まさに青森県と隣り合わせのエリアに位置する八峰町。町内に広がる森林は世界自然遺産「白神山地」に連なり、その一部は秋田白神県立自然公園に指定されている。また、変化に富む岩礁が続く八森地区の海岸は「八森岩館県立自然公園」となっている。

この自然豊かな町で海の安全を守っているのが、今回訪れた八森救難所である。秋田県漁業協同組合の北部総括支所内に拠点を構え、救難所員59名は全員、漁業に携わる。

取材班が八森救難所を訪れたのは梅雨明け直前の時期。空は曇って時折雨がぱらぱらと降り、海面はやや波立っていた。しかし、この時期の海は穏やかなものです、と所長の加賀谷弘さんは話して下さった。「注意が必要なのは、やはり冬。寒冷前線によってシケになることが多いし、状況が急激に変わって、経験を積んだ漁業者でも予測が追いつかない時もあります」加賀谷さんの前任の救難所長であり、約20年もの間、救難所のトップとして海難救助活動を率いてきた山本健藏さんはうなずき、漁船の海難事故の蓋然性が高まるのも冬です、と付け加えた。

救難所員の全員が漁業関係者である八森救難所では、海の利用状況面の事情もあり、出動する海難事故のほとんどが漁船絡みのもの。利用者が海を熟知しているため、救難所としての救助活動は2～3年に1度程度とのことだが、その分、発生した海難事故は深刻なものとなる。

現在の救難所長、加賀谷弘さん。秋田県人らしい、朴訥な語り口が印象的。

八森救難所の拠点となっている、県漁協北部総括支所の建物。

平成18年12月13日に起こったハタハタ漁船の転覆事故も、一つ間違えれば多くの人命を失いかねない危険な状況だった。

さまざまな危険が潜む季節ハタハタ漁

そもそも冬のハタハタ漁（季節ハタハタ漁）自体、危険と隣り合わせの側面を持つ。ハタハタは本来深海魚であり、通常は水深300m、水温1.5～2.5℃の砂泥底に生息している。したがって底引網漁では、休漁期間を除き年間を通じてハタハタの水揚げがある。

冬になり、シケで撹拌された海水の温度が低下すると、産卵のため、冷たい海水に乗ってハタハタが沿岸の藻場に押し寄せてくる。これを定置網や刺網で獲るのが「季節ハタハタ漁」である。漁場は岸から30～50mのところ。水深は数mで岩も多く、操船には細心の注意が必要だ。出漁は天候を見計らって行われるが、加賀谷さんの言葉の通り、冬の日本海の状況は変わりやすい。さらに、季節ハタハタ漁のシーズンは毎年11月下旬から12月中旬と期間が短いという事情も、漁業者が冷静な判断を行うことを難しくしている。「この辺りでは季節ハタハタ漁が一番の稼ぎ時。ハタハタの価格は時期や天候にも左右されて、漁獲量が少ない時は当然高くなりますので、少し天気が怪しくてみんなが出漁しない時でも、これくらいならがんばろう、と思ってしまう漁業者も出てくる。こういう時が危ない、事故が起こりやすいんです」と、県漁協の北部総括支所で管理専門員も務める村井敬一郎さんが腕を組んで語った。

県漁協の管理専門官も務め、漁業者の心理を知り尽くしている村井敬一郎さん。

事故当時、救難所長を務めていた山本健藏さん。所長歴20年超の猛者。

ところどころむき出しになりながら岩礁が続く、八森周辺の海の状況。

取材当日の事故現場。大シケの中、陸から 80m ほどのところで A 丸は転覆した。

大シケの海で乗員10名のハタハタ漁船が転覆

平成18年12月13日の事故を振り返ってみる。乗員10名を乗せたハタハタ漁船A丸(1.3トン)は、前日12日の23時に出港。この時、海は荒れていなかったという。ハタハタの水揚げを3度行った後、13日1時25分頃、天候が悪化する兆しがあったため、定置網の引き上げに向かった。しかし引き上げ作業中に天候はどんどん悪化し、風向きも波の立ちにくい南風から西風へと変わって波が高くなっていった。そんな中でA丸の乗員は定置網の引き上げを行っていたが、ロープが船体の一部に絡まったうえ、切断用の刃物が海中に落下。そこに波が打ち付けて浸水、さらに横波を受けてA丸は転覆してしまう。

「季節ハタハタ漁の期間は夜中も水揚げがあるので、その日、私と加賀谷さんを含めた3名は当番でここ(北部総括支所の事務所)に泊まっていたんです。夜中2時過ぎ、A丸が戻ってこない、遭難したのではないかという連絡が入りました」救助活動に携わった山本優人さんは語った。山本さんと加賀谷さんは現場に向かい、陸から80mほど沖合で転覆しているA丸を発見。「海は大荒れで、波がばしゃんばしゃんと音を立てている状況。大変なことになったと思いました」そして加賀谷さんが事務所に戻り、当時の救難所長である山本健藏さんに連絡。救難所としての救助活動開始の判断を仰ぐとともに、海上保安部など関係機関に救助要請の手配を行った。

一方、A丸の船主に依頼され、救難所員の武田篤さんは自らの船である幸生丸(4トン)で出航し、乗員の救助に向かう。「水深の浅いエリアに船を出すのは怖かったけれど、必死に乗員の救助を求める船主の方を放っておくことはできませんでした」と武田さんは言う。自分がその場にいたら幸生丸を出航させませんでしたよ、と山本健藏さんは苦笑いする。その様子に、どれだけ危険な状況であったかが伺えた。

事故発生の一報を受け、現場に駆け付けた山本優人さん。

決死の救助活動により、乗員全員が奇跡の生還

誰もが最悪の事態を覚悟する状況だった。しかし、A丸の乗員は転覆した船の船底に這い上がり、救助を待っていた。当時の海水温は12℃ほどで、急激に体力を奪うほどではないものの、長時間水に浸かっているのは当然危険である。また、つかまるところのない船底から波にさらわれ海中に放り出される危険性もある。そこかしこに岩場があり、海面の状態も悪く船をA丸に近づけることができない状況下で、武田さんは慎重に船を操った。そして、武田さんとともに救助に向かった船主ほか3名の救難所員はA丸にロープを渡し、乗員を1人ずつ救助していった。3時過ぎ、無事9名を救出。残る1名、A丸の船長は、乗員を一刻も早く助けたいと海に飛び込み自力での上陸を試みたものの、荒れ狂う海の中で断念。近くの岩場にたどり着いて救助を待ち、海上保安部のヘリコプターで5時過ぎに救助された。

「正直に言って、全員助かるとは思っていませんでした」と山本健藏さんは事故を振り返る。「救助活動が成功したのは、この周辺の海の地形を知り尽くした武田くんが救助船を操船したこと、そしてA丸の乗員が全員救命胴衣を着けていたことだと思います」

A丸の救助活動に当たった救難所員は、平成18年度に名誉総裁表彰を受けた。そして北部総括支所では現在、救命胴衣着用の徹底を漁業者に指導している。「特に季節ハタハタ漁の場合は、救命胴衣を着けなければ出漁の許可を出しません。そうした対策を行うことで、人命が危険にさらされるリスクを少しでも防ぎたいと思っています」と村井さん。おかげで、この地域ではもう何年も漁船の海難事故で死者が出ていないんですよ、と加賀谷さんが付け加えた。

ひとたび事故が起これば仲間の漁業者がすべてを投げうって救助活動に乗り出してくれる。だからこそ、責任ある行動を取らなければならない——。北国の海には、そんな生真面目で暖かな精神が息づいていた。

救助船「幸生丸」を操り、決死の救助活動を展開した武田篤さん。

事故現場で当時の状況を語る山本優人さん。

ハタハタ漁船転覆

八峰町沖 乗員10人無事救助

平成18年12月13日、地元紙「秋田魁新報」が事故を報じた記事。

写真の岬へ山本優人さんは走り、事故状況を確認。

NPO秋田県水難救済会　第45回　海難救助訓練大会

県内で活動を行う９救難所が集合。当日は天候にも恵まれた。

梅雨明けの快晴の中、県内9救難所が救助活動の技を競う。

平成23年7月9日、秋田県にかほ市の金浦漁港にて、第45回海難救助訓練大会が開催されました。参加したのは県内の9救難所のほか、関係機関の秋田海上保安部、にかほ市消防本部・消防団、秋田県消防防災航空隊、金浦海洋少年団です。

青空の下、9救難所の対抗で救命索発射器操法やゴムボート操法などの救難技術競技が行われました。その後、合同訓練を実施。秋田海上保安部やにかほ市消防本部・消防団とともに、金浦救難所が火災船消火や浸水船から人命を救助する訓練を行いました。

「救助資器材の使い方について体験を通じて理解でき、救助活動に当たって大切な協力体制や協調性も育める、とても有意義な機会」という声も聞かれるなど、参加した救難所員は真剣な表情で訓練に取り組んでいました。閉会式では、救難技術競技で総合優勝を獲得した北浦救難所への表彰も行われました。

「救難技術を競い合うことで、救助活動の技量向上につなげてほしい」と挨拶した、NPO秋田県水難救済会の渡部幸男会長。

救命索発射器操法。使い方を知らないと、とっさの場合に発射器を扱えないという。

合同訓練シーン。関係機関との連携による救助活動を体験。

勤続30年・20年・10年を迎えた救難所員に対する功労表彰も実施。

ゴムボート操法の競技。ボートをまっすぐに進ませることが意外に難しい。

地元金浦の海洋少年団が、手旗信号を実演。

全国
地方救難所の
お膝元訪問

ニッポン港グルメ食遊記

救難所員が日々親しんでいる海は、多くの恵みを私たちの食卓に届けてくれます。「その土地ならでは」のものが多いのも海の幸の魅力……。
今回は、NPO秋田県水難救済会　八森救難所のお膝元、八森漁港の「港グルメ」をご紹介します。

秋田の「おふくろの味」の源

ハタハタ

秋田、八森といえば「ハタハタ」。冬の始め、身にたっぷりと卵（ブリコ）を詰め込んで沿岸にやって来るハタハタが有名ですが、この時期以外に沖合の底引漁で獲られるハタハタも美味。秋田の県魚として親しまれるハタハタをいつでも味わえるよう、県漁協北部総括支所女性部の有志が集まる「ひより会」では、獲れたてのハタハタを一夜干ししてから真空パックに加工し、地域の直売所などで販売しています。

「ハタハタの食べ方といえば、もちろんしょっつる鍋。粘り気がありプチプチした食感が楽しめるブリコが魅力です。同じようにブリコの食感が活きる煮付けもおすすめ」とひより会の代表、岡本リセ子さん。さらに伺うと、地元の方はブリコを抱いたメスはもちろんオスも大好き、というお話も。そして、「沖合で獲れたハタハタは身が柔らかくて美味しい。沿岸ハタハタよりもこちらが好き、という声もあるんですよ」とのこと。

ひより会ではハタハタを加工した魚醤「しょっつる」もつくっています。ハタハタの全身を発酵させたうえで、10回以上もろ過を重ね、瓶に詰められたしょっつるは美しい琥珀色。「しょっつる鍋」の調味料としてだけではなく、お刺身を食べる時のお醤油代わりに、和風ナンプラー感覚でサラダのドレッシングにと使い方もいろいろ。秋田名物のハタハタとしょっつる、ぜひご賞味ください。

「ひより会」が加工を手掛ける、ハタハタの真空パックとしょっつる。

さすが八森のハタハタは大型。ブリコが詰まった身は、ぷっくりとふくらんでいる。

気さくでアクティブな「ひより会」代表、岡本リセ子さん。

ひより会お手製のしょっつる。赤いキャップの瓶がハタハタ100%のもの、白いキャップはタラやホッケも原料にしたもの。

八森のもう一つの名物、夏が旬の岩ガキ。マガキの3～5倍ともいわれる迫力の大きさで、旨味とミネラルがたっぷり。

[秋田県漁業協同組合北部総括支所]

（お問い合せ）TEL：0185-77-2255

全国 54,000 人のボランティア活動を支えます

「「青い羽根募金 2011」活動レポート

効果的かつ安全な海難救助を行うためには、常日頃から組織的な訓練を行うとともに、ライフジャケットやロープなどの救助資機材の整備や救助船の燃料などが必要となります。これらに必要な資金は、全国的な募金活動等によって集められています。日本水難救済会では、海上保安庁のご指導により昭和25年から「青い羽根募金」を開始し、周年で国民の皆さまのご寄付をお願いしています。

三井国土交通副大臣表敬訪問のひとコマ。左から相原日本水難救済会会長、鈴木海上保安庁長官、三井国土交通副大臣、ミス日本「海の日」の樋口彩乃さん、坂本理事長

平成23年度青い羽根募金強調運動

日本水難救済会では、周年、青い羽根募金活動を展開していますが、7月～8月の2ヶ月間は特に「青い羽根募金強調運動期間」と銘打って41ヶ所の都道府県地方水難救済会と協力し、全国的な運動を展開しています。

7月1日には、青い羽根募金強調運動の一環として、日本水難救済会の相原会長および2011年度ミス日本「海の日」の樋口彩乃さんが、三井国土交通副大臣、小泉国土交通大臣政務官および鈴木海上保安庁長官を表敬訪問。青い羽根を付けていただき、募金運動への協力をお願いしました。

小泉政務官表敬

鈴木長官表敬

募金活動にご協力をいただいた全国各地の皆さん

東京海洋大学海王寮の皆さん

東京海洋大学海王寮寮生の有志61名が、7月2日・3日、東京都千代田区の有楽町駅および江東区の門前仲町駅付近の街頭において、青い羽根募金活動を行いました。

田後海洋少年団の皆さん

7月17日、鳥取県鳥取市鳥取港の“かろいち”鮮魚売り場と“わったいな”野菜売り場において、団員25名が青い羽根募金活動を行いました。

清水海洋少年団の皆さん

7月17日、静岡市清水区の日の出埠頭で開催された「第27回清水マリンフェスティバル」会場において、小学校1年から5年生の団員7名が青い羽根募金活動を行いました。

NPO長崎県水難救済会の皆さん

7月31日、長崎港で行われた「長崎ペーロン選手権大会」にあわせ、市内の街頭において、救助員の皆さんが青い羽根募金活動を行いました。

佐世保海洋少年団の皆さん

7月18日の海の日、佐世保海洋少年団の皆さんが佐世保市内で実施された市中パレードに参加し、あわせて青い羽根募金活動を行いました。

（社）琉球水難救済会の皆さん

7月1日、沖縄県那覇市のパレッドくもじ前広場において実施された、琉球水難救済会の平成23年度青い羽根募金運動出発式にあわせて、募金活動を行いました。

青い羽根募金支援自動販売機の設置状況

日本水難救済会では、売上金の一部が青い羽根募金に還元される「青い羽根募金支援自動販売機」の設置を全国展開してきました。平成19年8月31日にNPO長崎県水難救済会が第1号機を設置して以来、全国の水難救済会の協力もあり、平成23年7月末現在の設置台数は453台に増加し、平成22年度において、その寄付金額は募金全体の約33パーセントを占めています。

(社)琉球水難救済会

平成２３年３月２９日、那覇市泊に所在する琉球水難救済会の敷地内に支援自動販売機第１号機を設置し、同日、関係者が出席し設置式が行われました。

NPO能登水難救済会

平成２３年１月２５日、輪島市河合町の輪島温泉「湯楽里」足湯施設内に支援自動販売機を設置しました。自動販売機のカラーは輪島塗の施設が多い周辺環境に合わせ、漆をイメージした濃い朱色としました。

新潟県水難救済会

平成２３年４月２８日、新潟みなとトンネル東詰の「山の下みなとタワー」敷地内に支援自動販売機２台を設置しました。みなとタワーには高さ２７メートルの展望室などの施設もあり、多くの人が訪れています。

広報・周知活動

「青い羽根募金」についてより多くの方に知っていただき、その活動が幅広く浸透するよう、各企業からご協力をいただいております。

募金啓発ポスターの掲示

都営地下鉄、東京地下鉄（株）（東京メトロ）、（株）ゆりかもめ、江ノ島電鉄（株）、小田急電鉄（株）、相模鉄道（株）、東武鉄道（株）および成田空港ビルディング（株）の協力を得て、各駅の構内および空港ロビー等に阪神タイガース「城島選手」の募金啓発ポスターを掲示していただきました。

青い羽根の装着による募金啓発活動

SG ホールディングス(株)様では、８月の約1ヶ月間、水難事故救済活動への参画意識の醸成を図るとともに、広く一般の方々にも青い羽根募金を知っていただくことを目的として、佐川急便を始めとするグループ各社の全従業員の方に「青い羽根」を付けて業務を行っていただいております。

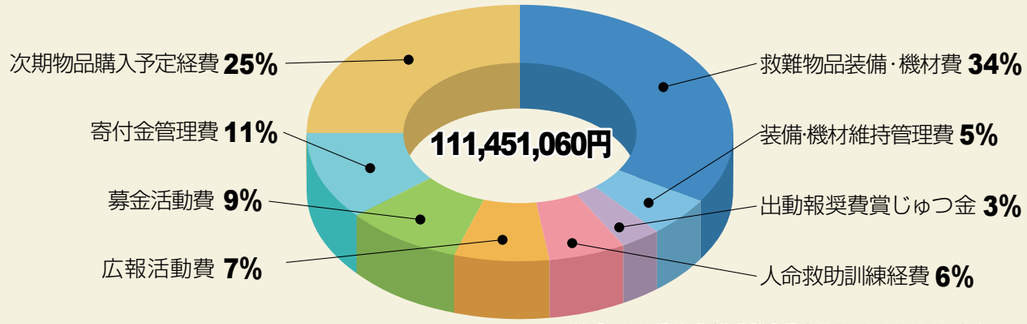
モニュメントにハッピと幟旗を装着

手芸ボランティアグループ「あじさい」の協力で、８月 26 日から JR 浜松町駅山手線ホームの「小便小僧」に水難救済会のハッピと青い羽根募金の幟旗を装着し、青い羽根募金の PR を行いました。

平成22年度 青い羽根募金の使用実績

日本水難救済会および地方水難救済会は、平成22年度も、海上保安庁、防衛省等中央省庁、都道府県、企業、団体からご支援をいただくとともに海洋少年団等からも募金活動にご協力をいただき、募金総額は前年度より4,734,213円増となる91,531,792円となりました。

また、日本水難救済会の青い羽根募金口座に各企業、防衛省の陸上、海上および航空自衛隊各部隊、個人の方々および東京海洋大学学生寮寮生、小・中学校および高校生の皆さんの募金活動による多額の寄付がありました。募金をいただいた皆さまにお礼申し上げます。



前期からの繰越額（物品購入予定経費19,919,268円）を含む

■青い羽根募金の使途

人命救助訓練

水上オートバイ

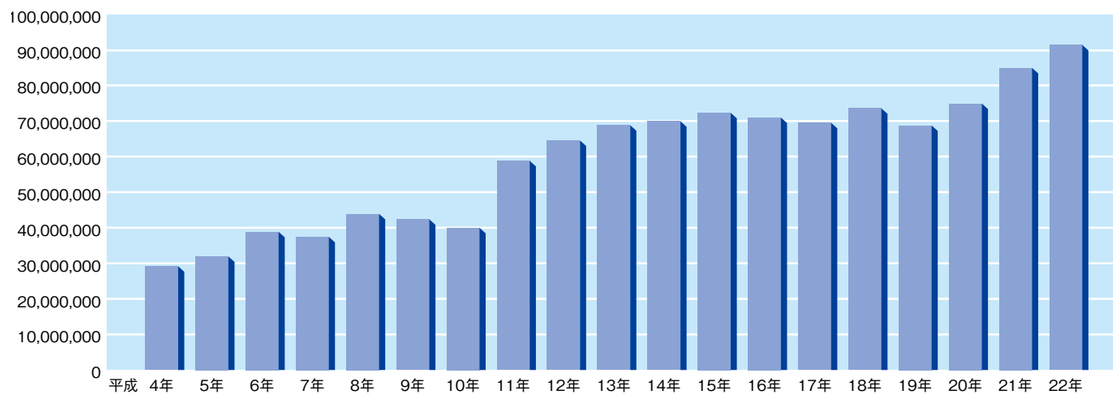
救急セット

AED

救難機材

消防・排水ポンプ

■募金実績の推移（平成4年～ 22年度）単位：千円



MRJ
歴史探訪
シリーズ

ボランティア精神の源を訪ねて…⑤

海上信仰の仏像

日本における水難救済の歴史を、多彩な角度から検証する本シリーズ。今回は、古くから金刀比羅宮に祀られ、海上信仰の対象ともなった「十一面観音立像」をご紹介します。

◆ 観音さまのお顔 ◆

一般に観音さまのお顔は柔和で、優しい微笑みをたたえておりますが、金刀比羅宮に伝わる「十一面観音立像」は分厚い唇に吊り上った目尻、大きな鼻と、およそ我々が考える観音さまのイメージとは掛け離れたお姿です。ご覧になられた皆さんは、その異様な雰囲気に戸惑ってしまうかもしれません。

しかしながら、優しさとは程遠い、荒々しくさえ見えるそのお顔に、何か例えようのない神秘性も感じられます。

◆ 神仏習合 ◆

十一面観音立像は、金刀比羅宮が金毘羅大権現と呼ばれていた時代、観音堂（現：三穂津姫社）のご本尊として祀られていました。

神社になぜ仏像があるのだろう？と不思議に思われるかもしれませんが、明治時代まで、こんぴらさんでは神社とお寺が共存していました。これを「神仏習合」または「神仏混淆」といい、神さまと仏さまは同体とされたのです。

こんぴらさんは長らく“金毘羅大権現”と称しておりましたが、この「権現」とは神さまのご称号＝神号で、神さまが権（仮）の姿になって現れるという意味です。

◆ 仏像の造り ◆

さて、この仏像ですが、制作は平安時代、8世紀まで遡るとのことです。

造りはヒノキ、またはカヤの一材から両腕を含めて彫り出した素木（しらき）造り。彫り口は、のみの痕が全身にみられる荒彫（あらぼり）風です。表面に銀泥で施された胸飾り、衣などの文様は、後世に補われたとみられています。

そして長い年月の中で、十一面あったお顔は、本体のお顔を残して失われてしまいました。悠久の歴史を感じさせる信仰遺物です。

◆ 海上信仰と観音霊場 ◆

また、観音さまは“海上信仰”と密接な関わりを持っています。

平安時代以降、海上はるか彼方の理想郷・観音浄土を希求する信仰が盛んとなり、全国各地の霊験あらたかな山々は観音さまの居所である補陀落（ふだらく）山に見立てられ、観音霊場となりました。

金刀比羅宮が鎮座します琴平山（象頭山）も、その特異な山容から瀬戸内海を航行する航海者の目印となり、海上信仰の聖地として崇められました。琴平山も観音霊場と考えられていたのかもしれません。

金刀比羅宮には、まだまだ数多くの謎が隠されています。

◆ 執筆者 ◆

金刀比羅宮禰宜　琴陵　泰裕氏

「十一面観音立像」を正面から眺めたところ。

見る者を圧倒するような、威厳の感じられるお顔。

側面から見た様子。前後左右のお顔、十面が欠落している。

レスキューグッズの最前線

マリンレスキュー MONOギャラリー

水難救助の成否は、その時の状況に応じ、「いかに上手に道具を使いこなすか」が大きなポイントとなります。
このコーナーでは、現場で「使えるMONO！」救助グッズを紹介いたします。

【器材紹介編】

ファイバーライト　クレードル
(FiberLite Cradle)

イギリスで開発された、落水者救助システムです。落水事故が発生した場合にすばやく広げて引き上げを行うことができ、救助に当たる乗組員のケガのリスクも低減するユニークな救命器具です。乾舷（フリーボード）３ｍまでの船で使用できます。

使用方法は簡単・シンプルで、畳んでコンパクトに収納することが可能。重さは約 4.3kg と軽量仕様となっています。SOLAS 承認。

【製品スペック】

○安全荷重 (SWL)	150ｋｇ
○サイズ	長さ1.94m×幅1.3m、重さ4.3kg
○参考価格	147,000円
○お問い合せ	株式会社ユーアールエー TEL:078-322-1122

レスキューチューブ

溺者救助の必須アイテム、レスキューチューブ。意識のない要救助者には、本体を浮き輪のように丸め、リング状にして使用します。要救助者に意識があり、つかまることができる場合は、棒状のままで使用することも可能です。

国内でも、海上保安庁や消防など多くの機関で採用され、海水浴場等ではライフセーバーに利用されています。国際ライフセービング連盟・日本ライフセービング協会競技規則　適合品です。

この状態で要救助者を引き上げることも可能

【製品スペック】

○材質	エソライトフォーム
○サイズ	長さ100cm×幅15 cm×厚さ8cm
○ストラップ長さ	270 cm
○参考価格	26,250円
○お問い合せ	全国のダイビングショップ、スポーツ用品店など

【便利アイテム紹介編】

ペリカンケース

コポリマーポリプロピレン樹脂を素材とした驚異的な強度と、O リングによる完璧なシールで、カメラ機材を始め精密機器やコンピュータ、携帯電話などを水やホコリ、衝撃からガードします。

サイズラインナップも豊富で、用途に応じさまざまなアイテムを収納することが可能です。警察や消防などでも採用されている、信頼性の高いアイテムです。

【製品スペック】

○サイズ	各種あり （例）・外寸：長さ 149mm ×幅 103 mm ×厚さ 54 mm、内寸：長さ 111 mm ×幅 73 mm ×厚さ 43 mm （例）・外寸：長さ 616 mm ×幅 493 mm ×厚さ 220 mm、内寸：長さ 544 mm ×幅 419 mm ×厚さ 200 mm
○参考価格	2,800 円～75,000 円
○お問い合せ	ペリカンプロダクツ TEL:03-3585-9100

特殊鋼ブレード「H-1 鋼ナイフ」

刃物は手入れをしないと、どうしてもサビが出てしまいます。こうした悩みを解消するのが、切れ味を保ちながら耐蝕性を高めたスーパーステンレス「H-1 鋼」を採用した「H-1 鋼ナイフ」。切れ味とサビにくさが両立された、マリンユースに適したナイフです。

左が参考商品の（1）海王（アトランティックソルト）、右が（2）海人

【製品スペック】＊参考商品の場合

○刃形状	直刃
○材質	ブレード材…H-1鋼、ハンドル材…ザイテル
○サイズ	（1）全長210mm・ハンドル長92mm、 （2）全長178mm・ハンドル長80mm
○参考価格	（1）11,550円、（2）10,395円
○お問い合せ	ガーバーサカイ株式会社 TEL:0575-29-0311

海難救助訓練ほか

平成22年度は全国37の地方水難救済会において、延べ342の救難所、支所から5,598名の救難所員が参加して実地訓練が行われました。

訓練大会にて。水上オートバイで溺者を救助

(社)琉球水難救済会

快晴の中、ライフスレッド全国競技大会を同時開催

平成23年5月22日、名護市のザ・ブセナテラスビーチ海域において、第7回沖縄本島地区救難所合同訓練を実施。同時に、県内で著しく普及している水上オートバイを救助活動に活用し、ライフスレッドを装着した体制での救助技術を向上させることを目的に、ライフスレッド全国競技大会を開催しました。

県下の各救難所、県消防および米軍消防、琉球大学ライフセービングクラブ等々100名以上が参加。名護市長、第十一管区海上保安本部長、名護海上保安署長など多数の来賓が参観される中、午前に救助技術理論と模範演技展示、午後にライフスレッド競技大会というスケジュールで執り行いました。

午前中のNPOウォーターリスクマネジメント協会職員による指導では、快晴の中、日に焼けた若い救難所員たちが熱心に説明に聞き入っていました。

ライフスレッド競技大会は二部構成。第一部の内容は、水上オートバイにライフスレッドを装着し、運転要員と救助要員がペアを組んで所定のコースを滑走しながら溺者(ダミー)を揚収するもの。第二部は、海上の水上オートバイをペアが泳いで牽引し、次にトレラーに乗せた水上オートバイをゴールまで押すものです。炎天下の中、全速力で泳ぎ砂浜の上を走るハードな内容となりましたが、皆全力で競技に取り組んでいました。

表彰式では参加者が数々のパフォーマンスを披露し、会場を沸かせました。

競技大会の1コマ。ライフスレッドを装着して海を駆ける水上オートバイ

心肺蘇生訓練も本番さながらの真剣さ

〔事務局からのお願い〕 平成23年度の海難救助訓練指定数は、「救助訓練実施要領平成23年度版」で各県水難救済会別に合計で341件が指定されました。しかし、予算の範囲内であれば指定数を超えて訓練を行っても助成金を交付することが可能ですので、できるだけ多く訓練を行うようお願いします。訓練の実施要領としては、毎年配布する当該年度版の訓練実施要領のほか、「救難所員訓練必携」と「海難救助作業マニュアル」を各救難所に配布しておりますのでご活用ください。

高知県水難救済会

地域の特性に合わせた事故想定で実践的な訓練を展開

本格的な海洋レジャーシーズンの到来を控えた平成23年6月21日、宇佐漁港しおかぜ公園岸壁とその前面海域で、海洋での人命喪失を防ぐとともに津波など自然災害発生時の救助活動も想定した実地訓練が宇佐救難所により開催されました。

訓練は二部構成で、第一部では事前訓練として、海上保安官より身近にある用具を使用した救助方法の説明がありました。第二部の海上実地訓練ではホエールウォッチング船参加のもと、宇佐沖を航行中のホエールウォッチング船A丸から乗客複数名が海中に転落し、漂流した事故を想定し、実施。本船から救難所、海上保安部への情報伝達や、本船および救難所所属の救助船による救助訓練を行いました。その後、海中転落者を救助する訓練として、体力の有無など被救助者の状況に合わせた救助や、ペットボトルを使用した救助の実演、AEDの取扱いや心肺蘇生法について訓練を行いました。地域の特性に合わせた、実践的な訓練を展開することができました。

海中転落者の救助訓練シーン。被救助者の状況に合わせて3パターンの訓練を実施

身近なものを活用した転落者救助法の実演シーン。写真で使用されたのは空気を入れたレジ袋

岡山県水難救済会

国際トライアスロン大会の競技者の安全を守る

平成23年7月10日、岡山県倉敷市児島ボートレース場をメイン会場として、倉敷市と倉敷国際トライアスロン実行委員会の主催により「第1回倉敷国際トライアスロン大会」が開催されました。茨城から沖縄までの26都府県から、1人で3種目に挑む「オリンピックディスタンス部門」に525名、種目ごとに選手が交代する「リレー部門」に30組90名もの参加者が集まりました。

岡山県水難救済会では、水上オートバイを救助艇として使用する「ボビーズレスキューステーション」から3台の水上オートバイを派遣するとともに、玉野市渋川海水浴場を拠点とする「岡山ライフセービングクラブ救難所」所属の救難所員10名がボランティアとして参加し、児島ボートレース場内で行われた水泳部門の運営を支援。途中棄権者9名に対し、水上オートバイの機動性とライフセービングの知識・技術を発揮して救助を行い、競技の安全を守り、大会の円滑な運営に大きく貢献しました。

途中棄権者を水上オートバイで搬送中の救難所員

(社)琉球水難救済会
海の安全を守る団体の一員として訓練に参加

平成23年6月14日、「恩納・読谷地区海難救助連絡協議会」が主催するマリンレジャー事故対策訓練に参加。「海難救助連絡協議会」は、第十一管区海上保安本部・漁協救難所・リゾート救難所およびレジャー事業所・警察や消防など行政機関等により構成され、海洋レジャーの安全確保向上を目指す組織です。

平成23年度は残波岬ロイヤルホテルが訓練会場となり、琉球水難救済会所属の10救難所・救難所員25名が参加。消防による心肺蘇生やAED取扱い訓練のほか、NPO沖縄ライフセービング協会講師により、水上オートバイにライフスレッドを装着しての救助・搬送訓練が行われました。また、第十一管区海上保安本部や消防、救難所の連携によりシュノーケル中の行方不明事故を想定した実地訓練も実施され、本番さながらに緊張感のある訓練が展開されました。

救難所員による水上オートバイを使用した溺者搬送の様子

(社)北海道漁船海難防止・水難救済センター
一刻を争うその時、迅速・的確に行動するために

平成23年4月13日、北海道常呂郡佐呂間町の富武士海岸壁にて、佐呂間救難所が実地訓練を行いました。参加者は救難所員43名をはじめとする50名。海難事故に対して迅速に対応できる知識や技術の習得と、救難所員の命と財産を守る意識の向上を目的に、基本動作、乗揚船救助、火災船救助の訓練を行いました。

救難所員による救命索発射器操法訓練

(社)北海道漁船海難防止・水難救済センター

平成23年6月1日、北海道礼文町大字香深村ワウシの香深新港東岸壁で利礼救難所連合会が合同訓練大会を実施しました。参加人員は6救難所員約240名です。救難技術の知識と技能を磨き、組織的な行動を習熟することを目指し、救命索の発射や心肺蘇生法、ゴムボート漕法などについて訓練を行いました。最後に、(社)北海道漁船海難防止・水難救済センターによる心肺蘇生AEDの講習会も開かれ、参加した救難所員は真剣にその技術を学んでいました。

救難所員によるゴムボート漕法訓練

新設救難所の紹介

海難救助活動の拠点となる新たな救難所が新設されています。今回は10カ所の新設救難所をご紹介します。なお紹介文は、それぞれの救済会および救難所からご提供いただきました。

[NPO神奈川県水難救済会]
逗子救難所

平成23年4月1日設立　所長以下63名

逗子周辺の海域は漁業活動が行われているほか、マリンスポーツや海水浴など、年間100万人以上が訪れ盛んに利用されています。反面、水難事故の多発海域の一つともなっています。

この海域に、新たに逗子救難所を設立。従来は漁業従事者やマリーナ、海洋レジャーの6団体がそれぞれ救助活動に当たっていましたが、その経験を活かしさらに人命救助に尽力するため、相互協力による水難救助体制を構築することとなりました。

すでに多くの救難所が漁業協同組合を中心に組成されていますが、これまでとは異なる、多団体での運営となります。県内にはまだ救難所が開設されていない地区があり、今後増設していくうえで、逗子救難所の新たな運営方式が注目されます。

[(社)福岡県水難救済会]
大岳救難所

平成23年4月1日設立　所長以下14名

福岡市の博多湾東部、国営海の中道海浜公園と志賀島の中間に位置する福岡マリーナを拠点に、県内45番目の救難所として設置されました。大岳救難所は救助艇に水上オートバイを配備しており、巡視艇や警備艇、漁船が近寄れない浅瀬や海水浴場などの事故にも素早く対応できることが大きな特徴です。福岡地区小型船安全協会会長でもある廣瀬英樹所長のもと、ライフセーバーや海上安全指導員など、計14名で構成されています。

水上オートバイの特性や機動力を活かし、いち早く現場に駆けつけて海上保安庁の巡視艇やヘリコプターと連携した救助活動ができるよう日々訓練を重ねるとともに、救助活動と安全啓発、事故防止に努めてまいります。

[(社)琉球水難救済会]
美々ビーチ救難所

平成23年4月3日設立　所長以下10名

沖縄本島最南端の救難所として、美々ビーチ救難所が設立されました。美々ビーチは県都那覇から10kmの距離に位置する、糸満海人(ウミンチュ)で知られた漁業の町糸満市の埋め立て造成地にあり、年間20万人の県民や観光客が訪れる一大観光スポットとなっています。

救難所にはこの海域を熟知したベテランのライフセーバーたちとともに、8隻の水上オートバイやモーターボートを配置。万が一の際には、これらが救助船として活躍します。

開設直後に故障した水上オートバイを救助するなど、美々ビーチ救難所はすでに大活躍しており、今後が期待されます。

新設救難所の紹介

[鹿児島県水難救済会]

出水市救難所

平成23年4月1日設立　　所長以下156名

出水市は鹿児島県の北西部に位置し、陸の三方を阿久根市・薩摩川内市・さつま町・伊佐市および熊本県水俣市に接しており、北西は八代海（不知火海）に臨んでいます。八代海沿岸海域では漁業やレジャーが盛んに行われているため、海への転落事故や、衝突などの船舶事故の発生が心配されています。

本市では、海難事故防止策と救助活動を充実させるため協議を進め、北さつま漁協出水支所・鹿児島県西部小型船安全協会出水支部・出水市消防団・出水市消防本部・出水市により組織する、県内41番目の救難所「出水市救難所」を設立しました。

今後は、関係機関と協力しながら海難救助訓練等を行い、構成団体間の連携強化と海難救助活動体制の充実に努めます。

[鹿児島県水難救済会]

長島町救難所

平成23年4月1日設立　　所長以下548名

鹿児島県の最北端に位置する長島町は大小23の島々で構成され、周囲を八代海・東シナ海に囲まれた、温暖で自然豊かな町です。これまで長島町に救難所はなく、漁業関係者を中心とした地域の皆さまによる救助に頼っていました。本町は長い海岸線と温暖な気候を有していることから海藻類の採取漁業や沿岸および沖合漁業が盛んで、漁業が町の基幹産業となっています。一方、近年交通の利便性向上から人の往来が増加し、マリンレジャー目的の観光客も増えています。こうしたことを背景に、串木野海上保安部および天草海上保安署の協力のもと関係団体と協議を進め、本町と東町・北さつま両漁業協同組合・消防団を中心として、長島町救難所設立の運びとなりました。

[岡山県水難救済会]

黒崎漁業協同組合救難所

平成23年5月1日設立　　所長以下11名

岡山県西部の水島灘沿岸部には1級河川「高梁川」の河口があり、水島灘に点在する島嶼部沿岸は水深が浅い地形となっています。付近には県内有数の沙美海水浴場が立地しており、夏季はマリンレジャー活動、冬季は養殖業が盛んな地域です。

そのような背景により小型漁船の操業が多く、また全国屈指の水島コンビナートに出入港する大小船舶の往来も頻繁であることから、衝突や乗揚げ、小型船舶や漁船からの海中転落等の海難事故が年間を通じて発生する状況となっていました。

こうした中、岡山県水難救済会の活動に理解を示された黒崎漁業協同組合より申し出があり、水島灘を熟知されている漁業者が救難所員となり、活動していく運びとなりました。

[千葉県水難救済会]

富津岬PW救難所

平成23年6月16日設立　　所長以下18名

新富津救難所

平成23年6月16日設立　　所長以下8名

富津岬は東京湾に突き出た岬で富津公園として整備され、南房総国定公園の一部に属し海洋レジャーのメッカとして人気を集めています。この海域の救助体制強化の一環として、当地区を基盤に活動しているパーソナル・ウォータークラフト（通称水上オートバイ）安全協会の協力を得て、水上オートバイの海難救助、事故防止などを目的に救難所を設置。水上オートバイのユーザーのみで構成している救難所は、全国的に珍しい例と考えられます。

また、富津岬の南側を担当区域とし、新富津漁業協同組合内に事務所を置く新富津救難所も設置しました。当漁協は海苔の生産に携わっておりますが、海苔柵に侵入するボート・水上オートバイがあとを絶たず死亡事故も発生しており、救助体制の強化を図ったものです。

[千葉県水難救済会]

房総マリーナ救難所

平成23年6月16日設立　　所長以下2名

いすみ市は千葉県南東部に位置し日本一を誇る伊勢海老の水揚げを始め、漁業と農業が盛んな自然豊かな街です。

近年の海洋レジャーの普及に伴い、いすみ市の海には年間を通じて多くの人に利用されており、特にサーフィンについては世界でも有名な選手が訪れる場所となっています。

風浪に影響されない夷隅川河口付近では水上オートバイやサーフィンが急増し、事故が多発するようになったことから、（株）房総マリーナの救助部門が主体となり救難所を設立、現在は事故の撲滅のためにパトロールや安全講習会を実施するなどの活動を展開しています。これからも救助活動を行いながら、いすみ市と連携して事故防止の推進を図ってまいります。

[大阪府水難救済会]

高石地区救難所

平成23年7月20日設立　　所長以下5名

大阪湾内の大阪府域（9市3町）では総延長80km超を対象に、従来、北は大阪地区救難所から南は岬地区救難所まで、5救難所が設置されていました。しかし、堺地区から岸和田地区の間に救難所が無く憂慮していたところ、高石市漁業協同組合より高石地区救難所設立について快諾をいただきました。

当地区には大阪府立漕艇センターがあり、浜寺運河でのカヌー練習が盛んに行われ、毎年高石商工会議所主催のドラゴンボートレースが開催されています。隣接するヨットハーバーには数多くのプレジャーボート等が係留されており、利用者でにぎわう海となっています。こうした地域において、海難事故に迅速に対応できる救難所の設置は意義深いことだと考えられます。

ボランティアスピリットの継承のために

普及活動レポート

日本水難救済会では、海事思想や水難救済会ボランタリー思想を啓蒙することにより、将来の後継者になってもらえるよう、海上保安官やライフセーバーの方々を講師に招き、青少年を対象とした水難救済ボランティア教室を全国で展開しています。平成22年度は88件10,206人の参加がありました。

大阪府水難救済会による、阪南市立石田保育園でのボランティア教室の様子

平成23年度 若者の水難救済ボランティア教室

「若者の水難救済ボランティア教室」は平成13年度から始まった事業で、小中学生や高校生等の若者に海の知識を深めてもらうとともに海に親しむ機会を提供し、実地体験を通して救命技術を習得してもらうことを目的としています。さらに、海での安全意識の向上を図るとともに水難救済ボランタリー思想を啓蒙しています。今年度も国土交通省・海上保安庁・消防庁から後援を受け、各地で開催された模様を紹介します。

■大阪府水難救済会

取組みへの評価から、開催を依頼されるケースが増加

平成23年6月9日から21日にかけて、４ヵ所の幼稚園や保育園で園児を対象に「若者の水難救済ボランティア教室」を開催しました。いずれも、当会が今までに行ったボランティア教室の取組みを評価いただき、開催を依頼されたものです。

今回の教室では、海浜事故の防止を呼び掛けるとともに、ペットボトルなど身近なものを利用した救助方法の実演や、救命胴衣着用体験を行いました。また、家族の皆さまに救命胴衣着用の大切さを話していただくようお願いする「救命胴衣着用キャンペーン」も実施しています。

□阪南市立石田保育園

昨年実施した「若者の水難救済ボランティア教室」について、園長さまより今年も依頼をいただき、夏の到来を意識する季節である6月10日、園児と保育士、保護者を対象に海浜事故を防ぐためのボランティア教室を行いました。

当日は園児と保育士にペットボトルを利用した救助や救命胴衣着用を体験していただきました。

救命胴衣の着用や救助活動。新鮮な体験に園児たちも興味津々

□こども海洋環境教室

大阪湾クリーン作戦イベントで堺海上保安署が主催する「こども海洋環境教室」の一環として「若者の水難救済ボランティア教室」を開催しました。

ペットボトルなど身近なものを使った救助法や、周囲にレスキューがいない場合の救助法などを伝授するとともに、心肺蘇生訓練を行い、人形やAEDを使用して来場者の皆さまにも心肺蘇生法を体験していただきました。

子どもたちによる心配蘇生法の体験

約100名と多くの子どもたちの参加を得られた、盛況の会となりました。

■岡山県水難救済会

海水浴場に臨む小学校で、命を守る方法を伝授

平成23年7月14日、県内有数の海水浴場である沙美海水浴場が目の前に立地する倉敷市立沙美小学校において、「若者の水難救済ボランティア教室」を開催しました。

水島海上保安部より講師としてお招きした海上保安官が水辺で遊ぶ際の注意点について講習を行った後、着衣泳やライフジャケット着用、ランドセルやペットボトルなど身近にあるものを活用した「浮き」を生徒に体験していただきました。そして、海浜事故の未然防止を呼び掛けるとともに、海難防止思想の普及を図りました。

海の事故防止への関心は高く、当日は地元岡山のテレビ局の取材も

講師とバディーを組み、心肺蘇生法の手順を学ぶ参加者たち

■(社)琉球水難救済会

□沖縄県立糸満青少年の家

意識の高い参加者が、救命方法を熱心に学ぶ

昨年に引き続き、国立沖縄青少年の家より「自然体験活動指導者」養成研修公募の受講者に対する「若者の水難救済ボランティア教室」の開催依頼をいただき、平成23年6月5日、県立糸満青少年の家にて実施しました。

この教室には、小学校の長期自然体験活動において教育効果の高い活動体験を提供するため、青少年の健康や安全などに関わる指導、そして青少年の体験活動の指導を補助する指導者の養成を目的としています。受講者として学生や教育関係者、県内レジャー施設の関係者、各企業から意識の高い参加者が集まっており、積極的に学ぶ姿勢が見られました。

受講生の目的に合わせ、教室の講習も『命を守る～救命救急～』と題し、心肺蘇生法やAEDの取扱い方法などを指導しました。その後、グループに分かれて訓練。他の参加者がバディーを組んでダミーの人形で訓練する様子に参加者同士が意見を交換する姿が見られたほか、さまざまなケースを想定しての対応方法などを講師に積極的に質問をしていました。「過去にも救命救急法を学んだが、改めて定期的に学習することの大切さを感じた」など、参加者からも好評が寄せられた会となりました。

グループに分かれ、意見交換をしながら心肺蘇生法をマスター

□沖縄県立水産高等学校

「講師が倒れる」デモンストレーションで学びを効果的に

台風2号が接近する5月27日、第十一管区海上保安本部救難課や沖縄ライフセービング協会の協力もと、県立沖縄水産高校の海洋技術科1年生を対象に「若者の水難救済ボランティア教室」を開催しました。

始めに当会浅野常務理事が台風の見方などを講話し、次に、第十一管区海上保安本部職員による安全講話などが行われました。生徒たちは講師の話に真剣に耳を傾けており、メモを取ったり質問する姿も見られました。

その後、体育館2階の武道場に場所を移し、沖縄ライフセービング協会講師による心肺蘇生法訓練が行われました。最初にデモンストレーションで突然講師が倒れ、目前で心肺蘇生法が行われる様子には生徒達も驚いたようでしたが、集中して一連の心肺蘇生法の流れを見た経験がその後の講習にも役立ったようです。そしてグループごとに講師から心肺蘇生法とAEDの取扱い方法を学び、訓練を繰り返し行うことで、技術を身につけていました。

突然講師が倒れ、心肺蘇生が行われたデモンストレーション。生徒たちも熱心に見守る

最後は被災者と救助者に分かれ、「想定外の事態の中で何ができるか」をテーマに訓練。声をかけ合い救助しようとする生徒たちの姿が印象的でした。その後、本教室の目的を十分に実現したことが伺える感想文も寄せられました。

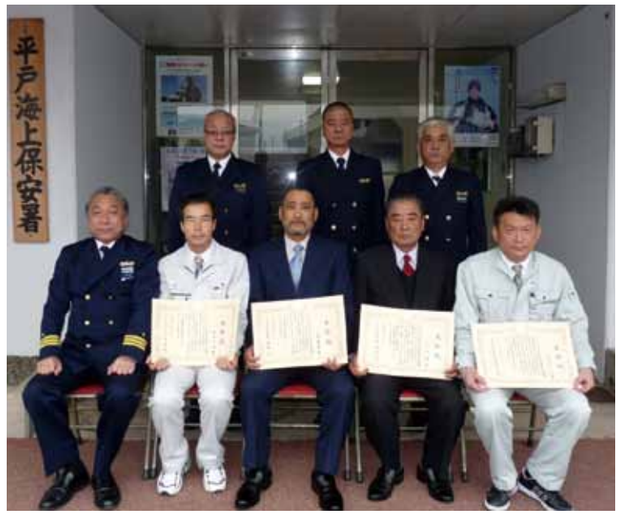
(社)琉球水難救済会　浅野常務による講演

未来の「海の男」たちは、海難事故の際の救命方法についても関心が高い

海難救助活動レポート

満潮時の潮流や磯波が生じる中、転落者を救助

NPO長崎県水難救済会　舘浦救難所



平成23年2月1日7時13分頃、平戸市生月町長瀬鼻北側の磯で釣りをしていた男性が大波に飲み込まれ、海中に転落。平戸海上保安署から救助要請が入り、舘浦救難所の救難所員4名が救助船松徳丸と廣漁丸で出動した。

当時の海域では北西の風の影響で2mの波が立っていたうえ、大潮の満潮時間と重なって潮流が速く、磯の複雑な地形により発生する予測不可能な潮流や磯波が救助活動を阻む状況であった。そんな中で、午前8時頃、現場に到着した救助船の松徳丸は岸から50m離れた地点で転落者を発見。無事に引き上げ、船内に収容した。

NPO長崎県水難救済会　舘浦救難所
古川　剛さん　吉山 弘一さん
小野 數廣さん　柳原 一満さん

岩礁に囲まれた海域で、波と闘いながら救助活動

和歌山県水難救済会　紀南東部救難所串本支所

平成23年2月22日6時40分頃、和歌山県東牟婁郡串本町の安指漁港沖合にあるスズシマへ乗客を渡そうとした遊漁船A丸が、船尾からの波を受けて転覆。乗員2名と乗客5名が海に投げ出された。同船の乗員から串本海上保安署に118番通報があり、同署から救助要請を受けた救難所員13名が出動。浅瀬が多数存在し10mを超える強風が吹く現場で連携して救助活動を展開し、同じく付近を捜索していた汽船Bとも協力しながら3名を救助。残り4名は自力で海岸にたどり着き、上陸した。しかし、うち1名が外傷性ショックにより死亡した。

和歌山県水難救済会　紀南東部救難所串本支所
寺本 正勝さん　山本 義裕さん　初田　宏さん
坂本　博さん　山崎 芳昭さん　平瀬 庄司さん
赤坂 寿穂さん　藤田 政次さん　初田 豊樹さん
三尾 政信さん　伏見 幸雄さん　瀬尾 一元さん
落合　樹さん

【東日本大震災関連】

避難中に故障した船を救助し、安全な場所へ曳航

（社）北海道漁船海難防止・水難救済センター　静内救難所

平成23年3月11日15時頃、漁船C丸の船長は大地震による津波から漁船を避難させるため出港したが、エンジンの故障により漁船が稼働できなくなった。同30分頃、C丸の船長は無線連絡にて静内救難所に救助を要請。同45分、救助船・第6進栄丸と第十八祐宝丸は現場に到着し、C丸を安全な場所まで曳航した。しかし津波警報発令中であったため、アンカーを落としてC丸をその場に待機させ、C丸の船長は第6進栄丸にて帰港した。翌12日6時40分頃、津波警報の解除を受けて救助船・第三福十丸が出港し、C丸を曳航して8時15分頃東静内港に帰港した。

（社）北海道漁船海難防止・水難救済センター　静内救難所
米田 仁さん　米田 進さん　築田 武治さん　築田 裕治さん　外舘 初義さん
外舘 勝光さん　外舘 守さん　岡崎 慎一さん

津波を受け、転覆した船を引き上げる

千葉県水難救済会　鴨川救難所

平成23年3月11日21時30分頃、小寄港に係留されていた漁船D丸が津波を受け、転覆。翌12日6時頃、連絡を受けた鴨川救難所の救助船3隻が出動し、9時頃、D丸を曳場に引き上げて救助した。

千葉県水難救済会　鴨川救難所
副所長 松本 喜代隆さん　副所長 岡崎 良次さん
庄司 喜吉さん　坂本 年壱さん　亘 政明さん　浜崎 千尋さん　野次 洋一さん
徳永 卓さん　斉藤 英司さん　山崎 智文さん　渡辺 明人さん　徳山 英樹さん

出港時に船体破損した船を一時避難のうえ、救助

（社）北海道漁船海難防止・水難救済センター　静内救難所

平成23年3月12日7時20分頃、東日本大震災の避難のため出港した漁船E丸は、出港時に船体を破損。危険を感じた船長が同30分頃無線連絡で静内救難所に救助を求めた。出動した救助船・第十八寿丸と第三昭栄丸は同50分頃現場に到着し、E丸を安全な場所まで曳航した。しかし津波警報発令中であったため、避難地点にアンカーを落としてE丸を待機させ、船長を第十八寿丸に収容して帰港。翌13日6時40分頃、津波警報解除を受けて救助船・第八十八みな丸を出動させ、避難地点よりE丸を曳航。しかし支柱が折れたため、E丸の稼働状況を確認し伴走警戒しつつ、E丸の自力・低速航行で三石港に入港した。

（社）北海道漁船海難防止・水難救済センター　静内救難所
坂尻 孝さん　坂尻 孝幸さん　赤石 昭司さん　赤石匡生さん　酒折 一さん　酒折 和彦さん
酒折 忠司さん　酒折 定二さん　芳賀 敏昭さん　吉田 隆秀さん　井田 和郎さん

発見された転覆船が、震災の被害船であると判明

宮崎県水難救済会　宮崎県中部救難所

平成 23 年 3 月 16 日 17 時 50 分頃、宮崎海上保安部より「宮崎県宮崎市大淀川河口の導流堤に転覆している小型船があるとの通報あり。事故の可能性があるため、救助を要請する」との連絡を受け、救助船・福元丸に救難所員 1 名が乗り込み出動するとともに、救難所員 1 名は陸上からの捜索を開始。18 時 40 分頃、宮崎海上保安部にて転覆船 F 丸の所有者と連絡がつき、転覆船は 3 月 11 日の東日本大震災に伴う津波のため、転覆・流出したものであることが判明。海難事故案件ではないことが判明、救難所としての対応は打ち切られた。

宮崎県水難救済会　宮崎県中部救難所
福元 勝美さん　福元 孝典さん

千葉県水難救済会　新勝浦市救済所

平成23年1月28日5時50分頃、救助船・吉野丸にて航行中に叫び声を聞いた救難所員は、海上で転覆している漁船G丸とその船長を発見。付近にいた救助船に乗っていた救難所員が携帯電話で別の救難所員に連絡を取り、その後即座に救助に向かった。

連絡を受けた救難所員が救難所長と各救難所に出動を要請、出動した救難所員20名は6時頃現場に到着して転落した船長の生存を確認し、先に救助活動を開始していた救助船の救難所員3名とともに救助を行った。7時10分、救助船2隻に曳航されて帰港したG丸を陸揚げし、救助活動を終了した。

山口県水難救済会　奈古救難所

平成23年2月4日8時頃、救難所員（山口県漁協奈古支店組合員）が奈古地先モドロで潜海漁業を開始しようとしたところ、海面に油が浮いていることを確認。船舶事故を予測し周囲を目視した結果、沈没した船舶と岩場で手を振って救助を求める遭難者を発見した。自船・元丸では救助が困難だったため、発見者の救難所員は救助船・第一漁協丸に協力を依頼し、岩場の遭難者を救助。救助後、遭難者を救助船・元丸で奈古港に搬送した。

千葉県水難救済会　新勝浦市救済所

平成23年3月6日6時30分頃、スズキ釣漁に出漁した漁船H丸の船長より、船が転覆したとの連絡が救難所員に入り、連絡を受けた救難所員が即座に救難支所長に通報、支所長より連絡を受けた救難所長が各救難支所長に出動を要請した。同時に、当初連絡を受けた救難支所長が地元の救難所員に救助を要請し、石橋丸・文栄丸・岡本丸ほか1隻の救助船が出動。海上に漂流しているH丸を発見した。当初連絡を受けた救難支所長がH丸船長の無事を確認するとともに、出動した救難所員全員でH丸の上架作業を終え、8時30分に救助活動を終了した。

福井県水難救済会　越前町水難救難所

平成23年3月9日9時35分頃、越前町漁連より「越前漁港沖を航行中の漁船I丸が強風のため転覆し、乗員3名が海に投げ出された。至急救助に向かってほしい」との連絡が入った。このため、越前町水難救難所所属の救助船・梅宝丸と金剛丸が出動。現場付近航行中であった協力船も含めた3隻が9時50分頃事故現場に到着、防波堤上にいたI丸乗員2名およびテトラポットにつかまっていた1名を救助し、越前町漁連岸壁まで搬送した。

救助された3名は10時18分頃救急車に引き継がれ、病院に搬送された。

（社）福岡県水難救済会　野北救難所

平成23年3月23日22時頃、野北港に夜釣りに来ていた親子のうち、子どもが波戸から海中に転落。父親はクーラーボックスを海中に投下するとともに大声をあげ、助けを求めた。たまたまバーベキューのため陸岸にいた救難所員が救難所副部長に連絡、救助船・漁栄丸と芳丸に乗船し救難所員5名が救助に向かった。

22時20分頃現場に到着した救難所員2名が転落者を船内に収容、22時30分頃救助船は帰港した。転落者はカキにより負傷していた。

（社）北海道漁船海難防止・水難救済センター　松前救難所

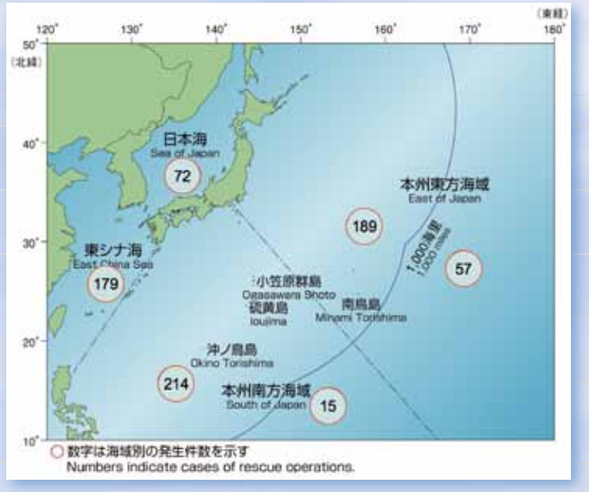
平成23年4月21日6時頃、漁船J丸は船体の修理のため原口漁港から松前港に向けて出港。しかし、6時30分頃、救難所員2名は陸上から、J丸が右回りに円を描くように不審な動きで航行している様子を確認。7時10分頃、2名が再度確認したところ同様の状況であったため、救難所江良支所長に連絡。救助船・貴生丸でJ丸の異変に気付いた救難所員2名が江良漁港を出港し、J丸に接近、1名がJ丸に飛び移った。船内を確認したところ、J丸の乗員1名が倒れていたため、J丸のエンジンを停止。乗員を貴生丸に移し、江良漁港に搬送した。また、J丸は救難所員が操船し、江良漁港に運んだ。J丸乗員は8時15分頃救急車で病院に搬送された。

洋上救急

事業開始以来、平成23年7月24日までに726件の事案に対応しています

洋上救急事業は、社会保険庁や各諸団体からの資金援助と医療機関、医師・看護師、海上保安庁や自衛隊の全面的な支援を受けつつ、昭和60年10月の事業開始以来、平成23年7月24日までに726件の事案に対応してきました。これまでに傷病者756名に対し、医師913名、看護師465名が出動し、診察や治療を行っています。

■洋上救急発生海域図



平成23年1月25日07：55発生

海上自衛隊と協力し、脳梗塞患者を救命

機関長が船内で倒れ、左半身麻痺と痺れ、ろれつがまわらないなどの症状を見せた。医療機関から指示を受け、船主から洋上救急の要請。8時15分、巡視船「やしま」が発動。11時、海上自衛隊に災害派遣要請を行った。12時43分、飛行艇US2に医師2名と看護1名が同乗し厚木基地を出発したものの現場海域の気象状況により着水できず、現場を離脱。17時39分、海上自衛隊は徹収した。

26日5時49分、「やしま」は該船と会合。MH560は機内に患者を収容し、7時30分「やしま」着。27日4時35分、横浜防災基地にて、患者を救急車に引き継いだ。患者は4時51分、横浜市立脳血管医療センターに到着した。

【発生位置】千葉県犬吠埼の東南東約 380 海里　北緯 32 度 57 分　東経 148 度 30 分
【傷 病 者】男性・65 歳　機関長（傷病名）脳梗塞
【出動医療機関、医師等】東海大学医学部付属病院　医師 :2 名　看護師：1 名
【出動勢力】海上保安庁横浜海上保安部　PLH やしま・MH560、羽田航空基地 MH805・特殊救難隊員 2 名、海上自衛隊　US-2

平成23年4月25日05：00発生

海上で意識不明となった患者を、当日中に病院へ搬送

男性・60歳のコック長が心臓発作を起こし、一時意識不明状態に陥った。該船からの救助要請および総代理店からの洋上救急要請により、緊急性を考慮し、硫黄島近海で救助活動を実施することを計画。海上自衛隊へ災害派遣要請を行うとともに、16時49分に海上保安庁羽田航空基地所属のLAJ501に医師3名と特殊救難隊員2名が同乗し、硫黄島に向けて出発した。

18時5分、海自のUH60Ｊが硫黄島西北西約300海里で該船から患者を揚収し、20時4分、硫黄島にてLAJ501に引き継いだ。その後、患者は22時30分に羽田航空基地に到着し救急車に引き継がれ、23時15分、日本医科大学付属病院に収容された。

【発生位置】硫黄島の西北西約 300 海里　北緯 26 度 58 分　東経 136 度 35 分
【傷 病 者】男性・60 歳　コック長（傷病名）胸膜炎
【出動医療機関、医師等】日本医科大附属病院　医師：3 名
【出動勢力】海上保安庁羽田航空基地　LAJ501・特殊救難隊員 2 名、海上自衛隊 UH60J

平成23年5月28日07：45発生

止血困難な患者を洋上で治療し、病院へ

操業準備中の操機長がいか釣り針を左手人差し指掌部に刺し裂傷を負った。出血が止まらず、漁業無線局を通じて八戸海上保安部に救助を要請。宮城利府掖済会病院に医療指示を仰いだ結果、止血および医師による早急な診察が必要との助言を受け、20時30分、船主から洋上救急要請がなされた。21時、第2管区は「つがる」および特殊救難隊員2名を発動。翌29日7時に病院を出発した医師は、9時48分、「まべち」の支援により「つがる」に乗船し、現場向けて出発した。31日9時8分、八戸の東北東700海里にてMH575が該船と会合。患者を機内に収容し、9時40分に「つがる」に到着、医師による治療を開始した。1日12時30分、八戸沖200海里から八戸に向けてMH575が出発。15時10分、八戸海上保安部の支援により八戸市立市民病院に到着した。

【発生位置】宮城県金華山灯台の90度約1230海里　北緯39度00分　東経168度35分
【傷 病 者】男性・63 歳操機長（傷病名）左第２手指裂創
【出動医療機関、医師等】八戸市立市民病院　医師：1 名
【出動勢力】海上保安庁函館海上保安部　PLH つがる、八戸海上保安部　PM まべち・MH575・特殊救難隊員 2 名

平成23年7月22日08：09発生

遠距離での案件に対し、迅速な救命活動を展開

千葉県犬吠埼東方1600海里付近の遠洋かつお・まぐろ漁船船内にて漁労長が心臓発作を起こした。一度は症状が安定したものの、23日21時00分頃再度発作を起こし、24日8時9分、洋上救急を要請した。遠距離へ早急な対応が必要とされることから、10時35分、海上自衛隊への災害派遣要請を行うとともに、巡視船「やしま」「でじま」および特殊救難隊を発動、東海大学医学部附属病院に出動を依頼。17時5分、医師等がMH806により「やしま」に乗船し航行を開始。一方、海上自衛隊US-2での対応医師等は25日3時52分に海自厚木基地を発して該船に向い、13時20分に会合。患者を機内に収容し南鳥島に向けて離水。同時刻をもって「やしま」は対応解除された。患者と医師等は南鳥島にてUS-2から海保MA724に引き継がれ、20時35分に厚木基地に到着。ドクターカーにて21時20分に東海大学病院に搬入された。

【発生位置】千葉県犬吠埼の90度約1600海里　北緯38度50分　東経173度09分
【傷 病 者】男性・66 歳漁労長（傷病名）不安定狭心症
【出動医療機関、医師等】（1）東海大学医学部附属病院　医師：1 名　看護師:1 名　(2)東海大学医学部附属病院　医師:2 名　看護師:1 名
【出動勢力】海上保安庁横浜海上保安部　PLH やしま、2 管区派遣船　PL でじま・MA724 × 2・MH806M・H931(搭載機)、海上自衛隊　US-2

■その他の洋上救急の状況（平成23年7月24日現在）

発生日時	発生位置	傷病者	状　況
平成22年 8月23日 （10：50）	北海道釧路の東北 東約500海里 北緯46度55分 東経153度46分	男性・45歳 機関員 （傷病名） くも膜下出血	機関員が頭痛を訴え、昏倒。投薬で小康状態を保っていたが、再度激しい頭痛を訴えたため、23日10時50分に船舶管理会社が洋上救急要請。MA868に医師1名、看護師1名が同乗し、釧路空港に向けて函館空港を出発。釧路空港着後、巡視船「えりも」に医師等が同乗し、釧路港を出港。該船と会合し、24日10時32分、患者を収容した。一方、24日15時にMH619は釧路航空基地を出発し、16時12分に「えりも」から患者等を収容。17時20分に患者を市立釧路総合病院に引き継いだ。医師等はMA868に同乗して釧路空港から函館空港に向かい、21時、病院に到着。患者は精密検査の結果、くも膜下出血のため1ヶ月の入院が必要と診断された。
平成22年 9月30日 （13：10）	宮城県金華山の東 南東約1,080海里 北緯33度1.8分 東経162度39分	男性･33歳 司厨長 （傷病名） 胃腸炎	司厨長が腹痛を訴え、30日16時、代理店から洋上救急要請。18時、LAJ500は特殊救難隊2名を同乗し仙台基地に向けて羽田空港を出発。一方、仙台医療センターの医師等は18時25分、巡視船「ざおう」に乗船した。仙台基地に到着したLAJ500より特救隊2名が「ざおう」に乗船。19時50分、「ざおう」出港。10月1日9時5分、緊急を要するため海上自衛隊に災害派遣を要請し、P-3Cが現場海域に向けて厚木基地を出発。10時28分､US-1Aに東海大学の医師等が同乗し厚木基地を出発。着水したUS-1Aが14時16分、患者を機内に収容した。その後US-1Aは17時42分に厚木基地に到着し、患者を救急車に引き継いだ。 2日8時20分、仙台医療センターの医師等を同乗したMH565が「ざおう」を出発、9時に仙台基地に到着した。
平成22年 11月30日 （03：00）	鹿児島県草垣島の 西約250海里 北緯30度42分 東経126度43.7分	男性･27歳 甲板員 （傷病名） 左手小指切断	長崎海上保安部を経由し十管区本部に、船主より操業中の該船乗組員が左手小指を切断した旨の洋上救急の要請があった。発生場所が遠距離であったため､海上自衛隊に災害派遣要請を行った。30日10時49分、UH－60Jが鹿屋基地を出発、医師と看護師を同乗し11時1分に谷山ヘリポート発。該船と会合し、12時23分に吊上げ救助完了。13時34分、谷山ヘリポートに到着し、患者を救急車に引き継いだ。患者は鹿児島徳洲会病院に搬送された。
平成23年 2月12日 （08：40）	沖縄県沖縄本島の 南南東約940海里 北緯18度18分 東経128度55分	男性・54歳 漁労長 （傷病名） 脳梗塞	漁労長が手足のしびれを訴え歩行困難となったため、医療機関から指示を受けた船長が洋上救急を要請。距離が遠いため、宮古島に向けて航行し航空機が救助可能な距離まで近づくよう指示。また、航空自衛隊に災害派遣要請を行った。巡視船「くにがみ」が現場に向け発動。13日9時、UH-60Jに医師1名と看護師1名が同乗し、宮古島分屯地を出発。10時25分、「くにがみ」が該船と会合し、患者と付添人を収容した。11時18分､UH-60Jが「くにがみ」から患者等を吊上げ揚収し､宮古島分屯地に向けて現場を離脱。13時、宮古島分屯地に到着し、患者を救急車に引き継いだ。患者は沖縄県立宮古病院に搬送された。
平成23年 2月16日 （14：35）	宮城県金華山の 東南東約191海里 北緯37度20分 東経145度25分	男性・61歳 船長 （傷病名） 脳梗塞	船長が突然倒れ、意識が回復したものの手足の痺れを訴えた。医療機機関から指示を受けた船主が洋上救急を要請。航空自衛隊に災害派遣要請を行った。17時48分、UH-60Jに医師1名と看護師1名が同乗し、該船向け松島基地を出発。該船と会合したUH-60Jは19時28分、患者を機内に揚収し、現場を離脱。20時46分に松島基地に着陸し、患者を救急車に引き継いだ。患者は石巻赤十字病院に搬送された。 なお、巡視船「ざおう」は16日16時にバックアップとして発動した。
平成23年 2月23日 （15：30）	千葉県犬吠埼灯台 の東北東約1270 海里 北緯26度57分 東経163度58分	男性・35歳 二等機関士 （傷病名） 右手挫滅創	二等機関士がポンプ作業中に巻き込まれ、負傷した。代理店から洋上救急要請。26日1時にMA725に医師2名が同乗し、南鳥島に向けて羽田基地を出発。5時43分にMA725は南鳥島に到着した。一方、5時20分に巡視船「しきしま」が該船と会合し､MH805により患者を吊上げて南鳥島に搬送。南鳥島において、患者をMA725に引き継いだ。6時45分にMA725は南鳥島を出発し、12時に羽田航空基地に到着、患者を救急車に引き継いだ。
平成23年 2月28日 （09：45）	沖縄本島の南東約 195海里 北緯23度40分 東経130度09分	男性・39歳 二等航海士 （傷病名） 直腸肛門周囲 膿瘍	山口からオーストラリアに向けて航行中のN号乗組員が直腸の膿瘍から出血し痛みを訴えた。インターナショナルSOSに医療指示を受けたところ、早急に医療機関に搬送し緊急手術が必要とのことで、船舶総代理店が洋上救急を要請。遠距離であったため、航空自衛隊に災害派遣を要請した。14時18分に空自のUH-60Jに医師が同乗し、那覇基地を出発。15時17分に該船と会合し患者を吊上げ揚収した。その後UH-60Jは16時41分に那覇基地に到着し、患者を救急車に引き継いだ。患者は南部徳洲会病院に搬送された。

■洋上救急の発生状況（昭和60年度～平成23年度）（平成23年7月24日現在）

年度／項目		昭和60年～63年	平成 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	計
発生件数		98	42	36	35	42	30	29	27	16	31	30	32	23	18	24	23	37	31	16	26	21	23	33	3	726
傷病者		101	47	36	36	45	35	29	28	16	31	30	32	23	18	24	28	41	31	16	27	21	23	35	3	756
医師等		193	71	63	65	77	60	54	53	33	53	52	60	50	36	46	50	68	54	31	51	37	42	69	10	1,378
（看護師の再掲）		71	(24)	(22)	26	28	21	19	22	10	17	16	23	17	13	14	15	12	17	12	17	9	(15)	(2)	(3)	(465)
海上保安庁	巡視船	98	34	30	24	25	16	13	24	11	23	11	23	16	13	11	14	28	19	16	19	11	15	22	3	519
	航空機	120	55	52	47	65	34	29	35	18	35	30	21	24	16	34	30	60	43	25	31	32	38	29	6	909
	特救隊等	29	18	20	14	20	22	18	17	15	12	20	12	10	11	10	18	25	25	17	26	32	39	26	6	462
自衛隊機		23	12	2	5	**	4	7	6	4	7	10	19	16	10	13	13	10	12	3	20	7	4	32	2	241
民間船		1	**	**	**	1	**	1	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	1	**		4
漁　船		56	24	17	21	26	12	16	17	10	21	17	22	13	13	16	12	23	17	11	14	7	11	17	2	415
汽　船		42	18	19	14	16	18	13	10	6	10	13	10	10	5	8	11	14	14	5	12	14	12	16	1	311
外国船		33	12	15	12	16	15	10	8	6	9	10	9	14	4	8	9	15	13	5	9	13	13	14	1	273

MRJ 互助会通信

3月11日に発生した東日本大震災によりお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被害を受けられた皆さま、そのご家族に、心からお見舞いを申し上げます。

東日本大震災は、東日本の沿岸部を中心に甚大な被害をもたらしました。特に、岩手県・宮城県・福島県・茨城県の被害は甚大で、これら4県等の互助会会員の方々も住居を全壊される等の大きな被害を被っており、7月15日現在で調査したところ、およそ1,400名の方々が被災されたとの報告を受けております。

互助会規約第18条では、「会員が自然災害又は火災等により、住居及び家財又はそれらのいずれかに被害を被った場合は、その会員に対し、別表の損害の程度に応じて3万円から10万円の範囲内で見舞金を給付するものとする。」旨規定しておりますが、調査資料に基づき算出した見舞金給付額は約1億4千万円となりました。

一方、現在、互助会で運用できる資金は約1千8百万円であり、会員数が現状で推移したとして、見舞金給付見込み額が互助会の運用資金を大幅に超える状況になりました。

平成22年度互助会臨時理事会を開催

平成23年7月27日、海事センタービル7階会議室において、日本水難救済会救難所員等互助会臨時理事会を開催し、東日本大震災における見舞金給付の対応策を審議していただきました。その結果、右のとおり決定されました。

（1）平成23年度分から、互助会年会費を当分の間1,000円とする。

（2）災害見舞金の給付額について、当分の間、別表「給付金」の額を「10万円⇒5万円」、「8万円⇒4万円」、「7万円⇒3万円」、「3万円⇒1万円」とする。

[東日本大震災による災害見舞金給付の請求は、原則として、平成25年3月10日までとなります]

平成 22 年度互助会臨時理事会の様子

互助会事務局より

1 互助会入会（更新）時期について

ご案内のとおり、23年度・互助会入会（更新）時期は、
加入申込日　23年8月31日（原則）
会費納入日　23年9月30日（原則）

＊災害補償・見舞金給付対象は23年10月1日からとなりますが、会費納入が遅れますと、効力は会費納入の翌日からとなりますので、ご承知おき下さい。（年度途中加入についても同様です。）

2 加入者数の現状について

加 入 者 数　21,999名（23年7月現在）
救難所員数　54,123名（23年3月現在）
加　入　率　40.6%

3 給付事業発生状況について

東日本大震災により被災された約1,400名の会員の方々に災害見舞金を給付することとしております。

この給付事業は、単年度では運用資金が不足することから、22年度から3～4年程度をかけて実施したいと考えております。

4 互助会加入案内について

本年度から当分の間、会費が1,000円となります。

事務局としては、より多くの方々に互助会に加入していただき、被災された会員の方々にできるだけ早く災害見舞金をお届けしたいと考えておりますので、ご協力をお願いいたします。

5 問い合わせについて

互助会についての、疑問・質問等、問い合せ先は
事務局　鈴木又は、中山が承ります。

公益社団法人への移行

目的と事業項目を充実させ、より社会に貢献する社団法人へ

本会は、平成22年10月21日に公益社団法人への移行認定申請を行っていましたが、3月25日に内閣総理大臣から認定書が交付され、登記手続き等を行い、4月1日付けで「公益社団法人」に移行が完了しました。移行後は、これまで以上に組織のガバナンスを確保することが求められます。

昨年5月の総会で承認された新定款では、本会の目的に「地震・津波等災害発生時の救援活動」を加えるとともに、事業として「災害発生時における救援に関すること。」を新たに位置付けました。

また、これまで定款に明確に規定されていなかった青い羽根募金について、「青い羽根募金に関すること。」を事業として明記しました。

平成23年度理事会・総会の開催

平成23年5月27日、第1回理事会および公益社団法人移行後初めての定時社員総会が開催されました。例年は総会に引き続き名誉総裁表彰式典が挙行されていましたが、本年は東北沿岸の救難所および救難所員が東日本大震災により甚大な被害を被っていることに鑑み、行われませんでした。

総会では、海上保安庁長官および水産庁次長から祝辞をいただきました。議事においては、平成22年度事業報告案および22年度収支決算案が承認されたほか、被災救難所等への支援策の一つとして、日本水難救済会の会員に関する規則が改正され、会費の減免規定が設けられることとなりました。

なお、平成22年度第3回理事会で承認された平成23年度事業計画および平成23年度収支予算書についても総会において報告されました。

総会での、鈴木海保長官祝辞の様子

理事会での、相原本会会長挨拶の様子

平成23年度青い羽根募金運営協議会を開催

「募金の適正を担保する方策について」等の諮問をいたしました

平成23年6月2日、千代田区麹町の海事センタービルで青い羽根募金運営協議会が開催されました。

協議会においては、平成22年度青い羽根募金活動および実績並びに使用実績、平成23年度青い羽根募金活動計画について審議が行われ、承認されました。

続いて、本会相原会長から協議会の吉田委員長に対し、下記の事項が諮問されました。諮問事項については、本年９月頃に答申されることとなっております。

（1）青い羽根募金等の適正を担保する方策について
（2）青い羽根募金の増加策について
（3）青い羽根募金の有効活用について
（4）青い羽根募金支援自動販売機等に関する規則の制定について

相原会長より諮問書を提出

エプロンを使って海難事故防止を呼び掛け

岡山県水難救済会「浜の母ちゃん」が親子魚料理教室を開催

岡山県水難救済会の賛助会員である岡山県漁協女性部連絡協議会（会長：奥野ミエ子、会員数：325 名）で構成された「おかやまライフガードレディース（ライフジャケット着用推進員）」は、漁船安全操業対策の一環としてライフジャケットの着用推進活動を実施しています。

本年度は、ライフジャケット普及啓発グッズとして「エプロン」を作成。小さな子どもにも親しまれるよう、赤い生地に海上保安庁のマスコットキャラクター「うーみん」をペイントしました。

早速、「おかやまライフガードレディース」18 名が、平成 23 年 7 月 26 日に岡山市のふれあいセンターで、第 11 回「浜の母ちゃん」親子魚料理教室を開催。エプロンのお披露目を兼ね、「新鮮な魚のおいしさ」と「命の大切さ」を伝えました。

魚の消費拡大と地産地消も呼びかけるこのイベントには、合計 43 名の親子が参加。かわいいキャラクターの入ったエプロンを着けた「おかやまライフガードレディース」に、子ども達は興味津々、「これなぁに？」と尋ねてくる子どもも。参加した親子に命の大切さと海に出かける際のライフジャケット着用の重要性を呼びかけることができ、お腹も心も満足できる時間を過ごしました。

作成されたエプロン。胸部分に「うーみん」をあしらって

「浜の母ちゃん」親子魚料理教室の様子

INFORMATION

●助成金を受けて行う事業には助成団体を明示

本会および地方組織が行う事業には、日本財団をはじめとする団体から助成金等の交付を受けて実施しているものがあります。ご承知のことと思いますが、海難救助訓練などがこれに当たります。

従って、看板や訓練資料、機材などを購入あるいは作成するに当っては、これら助成金を受けている団体名を必ず表記するよう、改めてお願いします。

●日本水難救済会会員募集

日本水難救済会では、会員（2号正会員または賛助会員）となって本会の事業を支援していただける方々を募集しています。

2号正会員資格は、本会の事業目的に賛同して、年会費1口1万円（1口以上）を納付された方で、会員になりますと、総会に出席することにより当会事業に参画できます。

賛助会員は、金品を寄付することにより本会の事業に貢献いただくもので、寄付された方は、法人税・所得税の控除を受けられる特典があります。

希望される方は、当会にご連絡いただければ、入会申込書をお送りいたしますので、必要事項を記入してお申し込み下さい。

編集後記

☆東日本大震災は東北地方の沿岸部に未曾有の大災害をもたらし、救難所や救難所員の多くの方々も被災されました。犠牲者の鎮魂と、被災地の早期の復興を祈っております。

☆大震災の発災直後、名誉総裁・高円宮妃久子殿下からお言葉とお見舞い金を賜りました。その後、名誉総裁は宮城県水難救済会の被災救難所をお見舞いされるため、宮城県へお成りになりました。このほか、全国の水難救済会や救難所から多額の義援金が寄せられ、第一次配分をしたところです。本号では、被災の状況から復興への取り組みまでをグラビアにまとめ、記憶にとどめることとしました。

☆今号のマリンレスキュー紀行は、秋田県水難救済会にご協力をいただきました。取材にご協力いただいた皆さまにお礼申し上げます。次号の取材を希望される救済会は、事務局までご連絡ください。

☆歴史探訪シリーズは5回目を数えますが、今号も金刀比羅宮襴宜の琴陵泰裕様に執筆いただきました。金刀比羅宮の歴史の深さを感じます。

☆青い羽根募金も例年通り推進しています。多くの方々の募金活動へのご協力に感謝です。

☆青い羽根バッチも大変な人気のようです。本会は、4月に公益社団法人に移行しましたが、その際制定された会員規則では徽章を制定するよう定められており、現在デザイン（当会の記章と青い羽根の組み合わせ）を検討中です。

（常務理事　上岡宣隆）

制作・印刷　エイアンドエー株式会社